筑波大学新聞

第334号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月　刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

教員人件費
2割削減への対応を視野に
各系に人事計画の策定求める

筑波大学は平成28年度から33年度までの第3期中期目標期間＝9面＝で各系に、最悪の場合、教員人件費の2割削減にも対応可能な方針で、人事計画を策定するよう求めている。基幹運営費交付金の減少を受けたもので、各系は大学本部と協議の上で人件費の抑制計画を策定している。方針の背景や今後を探った。（越智小夏＝比較文化学類2年、秋田耕平＝社会学類2年、田中開＝教育学類4年。3面に関連記事）

筑波大の基幹的な運営費交付金は、第3期中期目標期間中に毎年4億円ほど減額の予定。この減額分は教員人件費の2割に相当する。

稲垣敏之副学長（人事担当）によると、筑波大には現在、運営費交付金により雇用されている教員が約1630人。単純に2割削減しても、教員数は1300人ほどで、これは教育の質を担保する上で、文部省令の「大学設置基準」が求める必要最低限の専任教員数1177人を上回るという。

そのため稲垣副学長は「仮に教員人件費を2割削減しても、筑波大の教育と研究指導に必要な基準は満たす」と指摘している。

更に稲垣副学長は「人件費削減の中で、教員の退職と転出がカリキュラム自体の質に関わる場合は、審査の上で後任補充を認めている」とも発言。「外部資金を獲得したり、社会人対象の有料の公開講座を開くなどして、系の人件費削減幅の縮小につなげてほしい」と述べた。

一方、財務企画課によると、物件費は一定程度削減しているが、老朽化した施設設備の改修費用などを確保するため、大幅な削減は難しい。同課は「基幹運営費交付金の減額分を財源に再配分される機能強化経費を活用し、教員を重点配置する仕組みなどを人事担当と考えたい」としている。

永田恭介学長は「大半の削減額を人件費で補う」とするも「（教員人件費の）2割削減は、あくまで最悪の場合を想定した計画。削減額の半分程度は、大学の戦略に合わせ、教員人件費として系に戻したいと考えている」と説明している。

この方針を受け、一部の系では産学連携などを生かして外部資金を獲得するほか、別の系では類似の科目を統合し、少ない教員で現状の科目の幅を維持するなどし、人件費削減に対応している。

一方で、期間内に定年退職する教員がほとんどいない系では人件費の削減が厳しく、昇任人事や採用人事が難しくなっている。

9中期目標期間＝平成16年度の国立大法人化以降、各国立大が大学運営に関する目標と達成計画を実行する期間のこと。1期につき6年間と定められ、現在は28年度から33年度までの第3期の期間内。筑波大は今期、新たな入試制度の実施などを明記している。

取材に応じる永田学長（1月16日、学長応接室で）＝越智小夏撮影

変わる大学

国からの運営費交付金の減少、教員人件費の削減、32年度の全国的な入試改革……。時代の流れによって「変わる」大学の今を、現場から追っていきます。初回は教員人件費の削減方針についてです。

大学での軍事研究
筑波大 指針作成へ
研究内容の確認体制作る

防衛省が安全保障関連の研究に資金を出す制度を創設するなど、軍事研究と科学の関係が問われた問題で、筑波大学の永田恭介学長は3月23日、大学として軍事研究を禁止する方向で指針作りに着手したと明かした。この問題では日本の科学者の代表機関である日本学術会議（1949年創設）が3月、これまで通り、戦争目的の研究を否定する立場を継承する声明を発表していた。（添島香苗＝生物科学専攻1年）

永田学長は定例記者会見で、「研究資金の出所に関わらず、全ての研究には軍事転用される可能性がある」と指摘。その上で現在策定中の指針の素案では、大学内の全研究を対象に、それらが軍事に関わる内容かどうかの確認体制を作るとしている。具体的には、各研究に対し研究者本人と部局長・本部が「健全な科学の進歩に資するものかどうか」の確認を行っていくという。

永田学長は「今年度早々に概要は固まると思うが、（指針の成立までには）その後、学内での議論を経る必要がある」と話した。

一方、本紙が15年11月に筑波大生600人を対象にしたアンケートでは、日本の大学での軍事研究に対し賛成派が反対派を上回った。これについて永田学長は「一から学生と議論し、我々と同じ基準で考えられるようにしたい」と述べた。

学長「学生との議論必要」

防衛省は2015年、「安全保障技術研究推進制度」を創設。大学などから安全保障に役立つ研究を募集し、資金を出すもので、予算は16年度の6億円から17年度は110億円に増加する予定だ。

これを受け日本学術会議は昨年5月、「安全保障と学術に関する検討委員会」を設置。科学者が戦争に協力した反省から、1950年と67年に「戦争目的の研究」を否定する声明を出したことを踏まえ、計11回の会合で「軍事研究」の定義などを議論してきた。

同会議が3月に発表した声明では、軍事研究を否定した過去の2つの声明を「継承する」と明記。防衛省の制度にも触れ、「政府による研究への介入が著しく、問題が多い」と指摘した。

また声明では大学などの研究機関の役割にも言及。「自由な研究・教育環境を維持する責任を負う」と指摘し、「軍事的安全保障研究と見なされる可能性のある研究について、その適切性を（中略）技術的・倫理的に審査する制度を設けるべき」だと提言した。

日本学術会議の大西隆会長（豊橋技術科学大学学長）は昨年10月、本紙の取材に個人の見解として「自衛目的の研究は認めるべきだ」と発言していた。

ようこそ筑波大学へ
希望を胸にキャンパスへ

撮影地＝本部棟南駐車場

ぶらり俳句 筑波大 入学

・合格の胴上げは空見そびれて
・吹きかへす風少しある桜かな
・知らぬ花うつる入学写真かな

何もかもが新鮮な季節だ。ともがらの顔や学問という言葉の響きだけではない。入学したての頃、大学構内でさまざまな草花が見られるので驚いた。大学というよりは森だという悪評も聞くが、季節に応じてめまぐるしく変わる風景はなかなか捨てたものではない。次々に出会う新しい花に惹かれ、その気持ちを俳句に書き留めるようになった。（堀下翔＝比較文化学類4年、写真は広報室提供）

◆　◆

「ぶらり俳句 筑波大」は、学生俳人の堀下翔さんに寄稿を依頼し、連帯は学芸面に掲載しています。

堀下翔（ほりした・かける）
1995年、北海道生まれ。2014年「石田波郷新人賞」受賞。「筑波大学俳句会」主宰。「俳句」「俳句α」など俳句雑誌への寄稿多数。

3月7日の合格発表。午前10時に合格者番号の掲示板を職員が公開すると、集まった受験生らは一斉に歓声を上げた。合格者からは「まだ合格した実感がないが、勉学に課外活動に、充実した大学生活を送りたい」など、期待に胸を膨らませる声が多く聞かれた。

入学式は7日。2182人が学類・専門学群の新入生として式に臨む。例年式が開かれる大学会館が改修工事中のため、今年はつくば国際会議場（つくば市竹園）で開催される。

新入生歓迎祭は7日から5月31日まで。本祭は8日の10時から右の広場周辺で行われる。授業開始は学群生が13日、大学院生が11日から。（田中開、4面に合格者の声）

筑波おろし

昨年12月。筑波大蹴球部がインカレを制覇した背景には、闘病中の卒業生の存在があった。前主将の早川史哉選手＝アルビレックス新潟＝。決勝戦前日、病室から「日本一を取れ」と激励メールを送った。選手らも「早川さんのために」と、13年ぶりの優勝につなげた▼昨年、アルビレックス新潟に加わった早川選手は、6月に急性白血病であることを公表。そして、チームは早川選手の支援基金を設けた。ホームページには「みんなが応援しています」「すっとそばにいます」のメッセージがある▼体育会の試合の取材に赴くことが多い。そこで目にするのが、自らが試合に出なくとも、チームを応援し続ける控え選手の姿だ。その応援ぶりに、出場選手らは「応援席の彼らを見ると、勝ちたいという思いが強くなる」と一様に話す▼早川選手からメールを受け取った筑波大の選手たちも、こんな気持ちだったのだろう。筑波大のベンチには、常に早川選手のユニフォームがあった。昨日の選手は、今日のサポーター。善意の輪は限りなく広がる▼「本当にピッチに戻れるのか不安になる」とも正直あります。しかし、そんな弱気な自分をまた前向きにしてくれるのは、皆様からいただいた励ましの言葉や手紙などです」。1月、早川選手はホームページにこう記した。早川選手の一刻も早い復帰を祈りたい。

注目記事
記者の声「宿舎を問う」不法投棄問題 続く　4

新設された粗大ゴミ置場の様子

芸の道に終わりなし　5
研修所2つを改修　13
新宿舎　運用開始　14
西武筑波店32年に幕　15
特集　10,11
つくばでさかん クラウドファンディング
ミニ特集　7
新入生応援企画 筑波大の魅力的な施設

国立大で初
性的少数者への指針作成

大学全体での対応定める

筑波大学は3月27日、LGBTなど性的少数者への、具体的な対応や基本理念を記載したガイドラインを発表し、大学公式のホームページで公開した。このような性的少数者に向けた全学的な取り組みは、国立大で初めて。（越智小夏、写真も）

筑波大は平成27年度から、性的少数者に対する取り組みを開始してきた。昨年度には、性的少数者への対応を行ってきたダイバーシティ部門に、相談窓口を開設。昨年5月には全教職員へ向けて学生のプライバシーを守ることを目的に、学生の性別を名簿などの配布資料などに記載しないよう通知を行った。

今回作成されたガイドラインでは、少数者を差別しないなどの基本理念を記載。また、これまで各部署が対応してきた事例が1つのガイドラインにまとめられたことで、性的少数者に対する大学全体の方針が定められた。

ガイドラインには、▽大学発行の証書の中身や氏名変更などの情報管理の在り方▽体育や学外実習などの授業での対応方法▽更衣室やトイレなどの施設の利用方法▽就職活動支援の仕方……など、さまざまな事例への対応策について記載した。

しかし、今回のガイドラインでは、トランスジェンダーの学生に関する内容が中心。過去、大学への相談が多かったためで、今後同部門は、他の性的少数者や、学生だけでなく教職員を含めた内容も検討し、改訂していく予定だという。

同部門の河野禎之助教は、「少数派だからという理由で、個人が能力を発揮できないことはあってはならない。今回のガイドラインの制定で、性的少数者への理解が広がり、現状改善への第一歩になってほしい」と話した。

このガイドラインは、大学と同部門のホームページ上で詳しい内容が公開されるほか、同部門の窓口などに設置される。

同部門はスチューデントプラザ2階。相談窓口への連絡先は、電話番号・029・853・8504、メールアドレスdiversity-au@un.tsukuba.ac.jp

◆

ガイドラインに記された基本理念は、以下の3点。

「性自認や性的指向は本学が重視する本人の能力とは無関係であり、少数者ということで差別や嫌がらせがあってはなりません」

「性自認や性的指向に関わる情報やその開示・非開示、またそれらの表現は、当事者の意思でコントロールされるものであり、他者から不当に侵害されることがあってはなりません」

「LGBTなどの少数者にとって修学・服務の妨げとなる事柄は、適切な過程による合意形成を経て、合理的な範囲で取り除かれなければなりません」

プライバシーに配慮し、壁で囲まれた相談室（3月29日、スチューデントプラザで）

図書館でクラウドファンディング
館内資料の購入資金 集める

筑波大学附属図書館は1月26日から、国立大学で初めて館内資料の購入資金の調達を目的としたクラウドファンディングを行った。

当初の目標金額を中央図書館の資料を中心とする、学生向けの図書や雑誌の購入費用として300万円に設定したが、1月26日の開始から6日後にはこの目標額を達成。開始後、5日で目標額の2割が集まれば順調と言われる中で異例の達成となった。このため、中央図書館以外の専門図書館の資料の充実を目指し500万円を最終目標額とした。寄付は1口3000円からで、すでに305人から約509万円が集まり目標額を達成している。（3月31日現在）

クラウドファンディングとは、一定の期間内に不特定多数の支援者からインターネットを通して目標額を集めるというもの。これまでも筑波大ではクラウドファンディングを使い、落合陽一助教（図情メ系）の研究費用の一部の調達や、弘山勉准教授（筑波大学駅伝監督）を中心に陸上競技部の箱根駅伝出場を目指す「箱根駅伝復活プロジェクト」などを行ってきた。

附属図書館がこの取り組みを始めた背景には新たな資料の購入のための予算が不足する厳しい現状がある。大学全体の予算が毎年削減される中で図書館も予算が削減。さらに電子ジャーナルと呼ばれる学術雑誌の電子版（例：Nature など）は一年ごとに購読費用がかかる上に毎年値上がりしており、2000年ごろから図書館の資料費に占める割合が急激に増加している。これらの影響で、雑誌や新聞などの図書購入冊数は最も多かった年の約半数に減少した。4月には図書館学研究の学術雑誌「図書館界」や料理雑誌の「オレンジページ」などの購入を取りやめたが、今後も電子ジャーナルの費用の高騰が続けば、新聞や雑誌のための予算がさらに減少する可能性もあるという。

この取り組みは昨年11月、筑波大と国内最大のクラウドファンディングサービス「Readyfor」を運営するREADYFORによる業務提携を発表してから初めてのプロジェクト。

今回の取り組みに関して、図書館の職員は「一時的な資金集めで終わらせることなく、クラウドファンディングを通して、全国の大学図書館の抱える問題を世間に発信したい」と話した。

（吉永真理＝生物学類2年＝10、11面に関連特集）

購読している新聞の数が減少し、空になった書棚（3月30日、中央図書館で）＝徳永翼撮影

考古学研究室
古墳の調査結果を報告
后塚・王塚古墳

筑波大学考古学研究室は2月4日、2015年から行っていた、后塚古墳（茨城県土浦市）と王塚古墳（同）の測量調査結果を踏まえ、上大津公民館（同）で公開講座を開いた。これまでの調査結果を報告したほか、同研究室の学生が製作した王塚古墳の模型を展示した。

后塚古墳と王塚古墳は、共にこれまで草木が繁殖し過ぎていることから、十分に測量されていなかった。

そこで同研究室は、15年から、まず王塚古墳の測量を実施。同年12月には王塚古墳が特徴的な形態をもつ「前方後円墳」であることを明らかにした。

次に同研究室は16年から、后塚古墳の本格的な測量調査を実施。今年1月には、后塚古墳が王塚古墳と異なる「前方後方墳」の可能性が高いと結論付けた。

公開講座では、これらの研究成果を踏まえ、同研究室の滝沢誠教授（人社系）が講演。王塚古墳はその細かい形態の特徴などから、「4世紀前半の大和王権中枢とは別勢力である桜井茶臼山古墳（奈良県桜井市）の系列の勢力にゆらなるものではないかと指摘した。

また霞ケ浦沿岸一帯には現在、王塚古墳のほかに浅間塚古墳（茨城県潮来市）など複数の前方後円墳が発見されている。同准教授は、これらが「霞ケ浦沿岸の勢力が、船を使い交流していた証ではないか」とした。

滝沢准教授は「今後はこれらの古墳が『王塚古墳系列』として総括できるか検討したいと話した。（佐々木悠里＝人文学類3年）

開始から2年 連携話し合う
まちなか再生事業　北海道津別町でシンポ

筑波大学の大澤義明教授（シス情系）と都市計測実験室の学生が中心となり、市街地活性化を目指す北海道津別町の「まちなか再生事業」が開始から2年経過したのを機に、事業の成果を話し合う「津別まちなか再生事業をつくり・シンポジウム」が2月5日、同町中央公民館で開かれた。

北海道の東部にある同町の人口は、1960年のピーク時から約3分の1に減少。現在では5000人を割り込んだ。特に高校や大学を卒業した若者の人口流出が激しく、逆に人口に占める高齢者の割合は約4割となるなど、深刻な過疎化と高齢化が問題となっている。

このため、同町は中心市街地の活性化や、住宅地の集約化に向け、平成27年度から筑波大との連携を開始。昨年度からは建築が専門の加藤研助教（芸術系）も事業に参加している。今後は老朽化が著しい町役場の移転計画についても共に考えるといい、移転候補地の選定や建物のデザイン案などの検討も行っていく。

発表の打ち合わせをする津別高の生徒と都市計測実験室の学生（2月5日、津別町中央公民館で）

町の課題について提言も

シンポジウムでは同町の担当者が、新たな雇用の創出や同町への移住促進など今後の街づくりの方針を説明。また地元の津別高校生が3つのグループに分かれ町の課題や問題点などについて筑波大生と調べた内容を発表した。

高校生のグループは農業体験ツアーなどを行うことで町外から人を呼び込み、町への移住を促進する案や、SNSなどを用いて町の魅力を発信する案などを提案した。

発表を行った津別高生の1人は「自分たちが提案した解決策がどのような経済効果をもたらすかなど、専門知識を筑波大生に教わった。今回の提案が実現すればうれしい」と話し、町の担当者も「今回の発表で提案された案を少しでも実行に移したい。今後も高校生の意見を積極的に活用していく」と話した。

開始から2年が経った「まちなか再生事業」について大澤教授は「1年目は街づくりを考えるなど、人と人との交流が中心だった。今回から加藤助教が参加したこともあり、町役場の移転計画などでも連携が進み始めている」と成果を強調した。（岡田優太＝社会学類3年、写真も）

筑波大学出版会　近刊案内

観光戦略としての宗教
長崎の教会群と場所の商品化

松井圭介（生環系・教授）著

現在、世界は聖地に満ち溢れている。場所の魅力を発見し聖地を創造するという試みは、全国各地の自治体における観光まちづくりや地域振興の実践にあたっての重要な地域課題である。

聖地創造の仕掛けやホスト側の対応を通して、宗教空間がいかに観光資源と化されているのか、さらに場所の商品化の課題は何かについて、長崎県におけるキリシタンを事例に考察。

初刊本は2013年3月。好評につき今回は、プリント・オン・デマンド版（Amazon）として発売。50点以上の写真をカラーで収載。人文地理学の教科書。

A5判PODカバー版、約206頁。3月30日発売。2800円＋税

教員人件費の削減方針

各系の事情と現場の声

筑波大 9系長に取材

【1面参照】筑波大学の教員人件費の削減方針では、各系に最悪の場合、教員人件費を2割削減しても対応可能な人事計画の策定を求めている。筑波大10系のうち9系の長に聞いたところ、人事計画遂行のために外部資金の獲得や類似科目の一本化など、さまざまな対応を行っていることがわかった。一方、6年間という短い期間での大幅削減や、今後の見通しについて不安視する声も多く聞かれた。各系長への取材結果をまとめた。

（越智小夏、秋田耕平、田中開）

変わる大学

取材に応じる数物系の伊藤系長（2月7日、数理物質系長室で）＝秋田耕平撮影

基本的な人事方針

教員人件費の削減は各系組織の系ごとに行われており、各系は系長を中心に、最悪の場合である2割削減にも対応できる人事計画の策定を進めている。取材に応じた9系長によると、原則として定年退職する教員の後任を補充しないことで対応しているという。

33年度までの第3期中期目標期間に定年退職する教員数は、人社系45人、ビジネス系6人、数物系34人、シス情系23人、生環系37人、人間系32人、体育系15人、医学医療系30人、図情メ系14人で、回答のない芸術系を除くと計236人だった。

外部資金で対応

一部の系では、産学連携や補助金などの外部資金を用いて、人件費削減に対応している。その一つが数物系だ。同系では民間企業との共同研究を多く行い、企業が拠出する研究資金を得ている。そうした外部資金を研究力の維持と向上のため、助教などの雇用に利用している。

これらの教員は研究目的での採用のため、講義や演習を受け持っていない。ただ伊藤雅英系長は「これらの教員には、所属研究室での学生指導を依頼している。講義は行っていないものの、学生の教育と研究にとって欠かせない存在だ」と話す。

近隣機関とも連携

また医学医療系では、県や近隣の医療機関が筑波大に現役医師を講師として無償派遣し、学生の実習指導などを行う「寄附講座」を開講。それにより、大幅な人件費削減が可能だ。

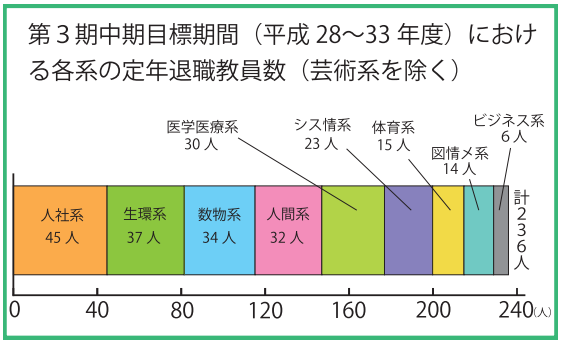
また同系では、国から医師不足対策の補助金を受けるなど、外部資金が他の系に比べ豊富。ただ同系の原晃系長は「国からの補助金は変動が激しいため、より多くの機関に寄附講座を依頼したい」と話している。

東京五輪後に懸念

体育系には、実際に選手の指導に当たる実践系分野、スポーツ生理学や工学などの理系分野、スポーツ哲学や社会学などの文系分野の、それぞれ事情が全く異なる3つの分野がある。

理系分野は官庁や企業からの共同研究が多く、外部資金が豊富だが、この資金はあくまで理系分野の研究資金であり、教員と資金が不足しがちな他分野で使うことが難しい。

系ごとに対応分かれる



また中川昭系長は「筑波大の体育分野は国内トップクラス。規模を維持することは不可欠だ」と語るが、頼みの大型外部資金は2020年の東京五輪に向けたものが多く、五輪後の先行きは不透明だという。

少ない定年退職者

このような状況の中、図情メ系では定年退職する教員が少ないため、教員の定年退職分だけでは2割削減を達成できず、期間内に昇任・新任人事を行なうことは難しいという。

同系の松本紳系長は「今回の人事方針を受け、今までの人事計画を見直さざるを得なくなった。教員数の減少は、カリキュラムの見直しなどを行うことで、ある程度対応していきたい」と語った。

科目の維持は難しい

人社系では、基礎研究が多いため、企業と共同研究を行える分野が少なく、外部資金の獲得が難しい。第3期中期目標期間内で全系のうち最多の45人が定年退職する予定だが、昨年度、任期付きでない常勤教員の採用は1人にとどまった。

その上、同系教員の講義は、他の教員が代講できない場合が多く、教員数の削減が科目数の減少に直結する。

例えば全学対象で開講される初修外国語（アラビア語）の授業は、担当の人社系教員が退職したが、補充は行われず、今年度からの廃止が決まった。

同系のある教員は「人社系は特に科目数が多く、現状の科目の維持は難しいのではないかとする一方で、同系の教員が多く受け持つ人文・比文・日目の各学類では、近・現代史や宗教学などの分野で、類似科目が多く開設されている、とも指摘する。

同系の遅野井茂雄系長は「定年退職者が原則補充されない中で、現状のような数多くの科目を維持することは難しい」とした上で、「類似科目を一本化するなどして、学べる範囲は保ちながら教員の削減に対応したい」と語った。

取材に応じる人社系の遅野井茂系長（2月2日、人文社会系長室で）＝秋田耕平撮影

新任人事

【副学長】教育担当＝清水諭▽研究担当＝木越英夫▽産学連携担当＝金保安則

【学群・学類長】数学類長＝竹内潔（数物系）

【博士課程研究科長・専攻長】〔人文社会科学研究科〕哲学・思想専攻長＝保呂篤彦（人社系）▽文芸・言語専攻長＝杉本武（同）▽経済学専攻長＝平沢照雄（同）▽法学専攻長＝根本信義（同）▽国際日本研究専攻長（前期）＝平山朝治（人社系）、（後期）＝辻中豊（人社系）〔ビジネス科学研究科〕経営システム科学専攻長＝佐藤忠彦（ビジネス系）▽企業法学専攻長（前期）＝本田光宏（ビジネス系）▽法曹専攻長＝森田朝哉（同）〔数理物質科学研究科〕化学専攻長＝山本泰彦（数物系）▽ナノサイエンス・ナノテクノロジー専攻長＝黒田眞司（同）▽物質・材料工学専攻長＝武田良彦（同）〔システム情報工学研究科〕社会工学専攻長＝吉瀬章子（シス情系）▽リスク工学専攻長＝遠藤靖典（同）▽構造エネルギー工学専攻長＝武若聡（同）▽社会システム工学専攻長＝吉瀬章子（同）▽社会システム・マネジメント専攻長＝吉瀬章子（同）〔生命環境科学研究科〕地球科学専攻＝角替敏昭（生環系）▽地球環境科学専攻長＝浅沼順（同）▽国際地縁技術開発科学専攻長＝松下秀介（同）▽先端農業技術科学専攻長＝三森眞琴（同）〔人間総合科学研究科〕スポーツ国際開発学共同専攻長＝本田靖（体育系）▽学校教育学専攻長＝片平克弘（人間系）▽心理学専攻長＝櫻井茂男（同）▽芸術専攻長（後期）＝長田年弘（芸術系）

組織の略称

【学群・学類】〔人文・文化学群〕人文学類（人文）比較文化学類（比文）日本語・日本文化学類（日日）〔社会・国際学群〕社会学類（社学）国際総合学類（国総）〔人間学群〕教育学類（教育）心理学類（心理）障害科学類（障害）〔生命環境学群〕生物学類（生物）生物資源学類（生資）地球学類（地球）理工学群〔数学類（数学）物理学類（物理）化学類（化学）応用理工学類（応理）工学システム学類（エシス）社会工学類（社工）〔情報学群〕情報科学類（情科）情報メディア創成学類（メ創）知識情報・図書館学類（知識図書）〔医学群〕医学類（医学）看護学類（看護）医療科学類（医療）▽体育専門学群（体専）▽芸術専門学群（芸専）

【修士課程研究科】教育研究科（修教）スクールリーダーシップ開発専攻（スクール）教科教育専攻（教科）教育学「国際教育」修士プログラム（教育P）

【博士課程研究科】人文社会科学研究科（人社）哲学・思想専攻（哲思）歴史・人類学専攻（歴人）文芸・言語専攻（文言）現代語・現代文化専攻（現現）国際公共政策専攻（国共）経済学専攻（経済専攻）法学専攻（法学専攻）国際日本研究専攻（国日）国際地域研究専攻（国地）▽ビジネス科学研究科（ビジネス）経営システム科学専攻（経システム）企業法学専攻（企法）法曹専攻（法曹）国際経営学プロフェッショナル専攻（国経）▽数理物質科学研究科（数物）数学専攻（数学専攻）物理学専攻（物理専攻）化学専攻（化学専攻）ナノサイエンス・ナノテクノロジー専攻（ナノ電子・物理工学専攻（電物）物性・分子工学専攻（物分）物質・材料工学専攻（物材）▽システム情報工学研究科（シス情）社会工学専攻（社工専攻）社会工学位プログラム（社工P）サービス工学学位プログラム（サ工P）リスク工学専攻（リスク）コンピュータサイエンス専攻（CS）知能機能システム専攻（知機）構造エネルギー工学専攻（構エネ）▽生命環境科学研究科（生環）地球科学専攻（地科）山岳科学学位プログラム（山岳P）地球進化科学専攻（地球環境）地球環境科学専攻（地進化）生物科学専攻（生科）生物資源科学専攻（生資科）国際地縁技術開発科学専攻（地縁技術）生物圏資源科学専攻（生物圏）生物機能科学専攻（生物機能）生命産業科学専攻（生命産業）環境科学専攻（環境）持続環境学専攻（持続環境）環境バイオマス共生学専攻（環境BM）先端農業技術科学専攻（先端農業）▽人間総合科学研究科（人間総合）フロンティア医科学専攻（医科学）スポーツ健康システム・マネジメント専攻（スポマネ）教育学専攻（教育専攻）教育基礎学専攻（教基）学校教育学専攻（学教）心理専攻（心理専攻）心理学専攻（心理学）障害科学専攻（障科）生涯発達専攻（生涯）生涯発達科学専攻（生涯科）感性認知脳科学専攻（感性）体育学専攻（体育）体育科学専攻（体科）芸術専攻（芸術）世界遺産専攻（世界遺産）世界文化遺産学専攻（文化遺産）ヒューマン・ケア科学専攻（ケア）スポーツ医学専攻（スポ医）コーチング学専攻（コーチ）スポーツウェルネス学位プログラム（SWP）スポーツ国際開発学専攻（スポ国）大学体育スポーツ高度化専攻（大学体育）生命システム医学専攻（シス医）疾患制御医学専攻（疾医）看護科学専攻（看護専攻）▽図書館情報メディア研究科（図情）図書館情報メディア専攻（図情メ）▽グローバル教育院（G教）ヒューマンバイオロジー学位プログラム（HBP）エンパワーメント情報学プログラム（EMP）ライフイノベーション学位プログラム（LIP）

【系】人文社会系（人社系）ビジネス系（ビジネス系）数理物質系（数物系）システム情報系（シス情系）生命環境系（生環系）人間系（人間系）体育系（体育系）芸術系（芸術系）医学医療系（医学医療系）図書館情報メディア系（図情メ系）

記者の声

徳永翼

学生宿舎
不法投棄問題 未だ続く
社会の一員としてマナーを

10年以上、粗大ゴミの不法投棄が続く筑波大学の平砂・一の矢の学生宿舎付近に、大学は3月、鍵付きの粗大ゴミ置き場を設け、入居者に限り無料で利用できるようにした。だが、設置後のゴミ置き場には、本来捨ててはいけない段ボールや靴などが無造作に捨てられている。また、ゴミ置き場の新設とほぼ同時に大学は宿舎周辺の粗大ゴミを一掃したが、本棚や冷蔵庫などの不法投棄は続くままだ。ゴミ置き場新設を知らない入居者がいることが大きな原因とみられ、不法投棄の可能性もあった。

不法投棄物は平成23年度からの5年間だけでも312トンで、大学が払った処分費は計1860万円。費用は徐々に増大しており、平成23年度に159万円だったのが、27年度には447万円になっている。

不法投棄が続いた一因には大学側の対応があると思う。宿舎たのは2015年10月。当時、不法投棄のたまり場は平砂・一の矢の学生宿舎付近などに少なくとも6カ所あり、最大で約6㍍四方の場所が2㍍近くの高さまでゴミで埋まっていた。業務用冷蔵庫など宿舎の学生のものとは思えないゴミもあり、宿舎以外の学生や学外者の不法投棄の可能性があった。

不法投棄が続いた一因には大学側の対応があると思う。宿舎付近の不法投棄は過去10年以上あったとされるが、大学側は08年、これらのゴミを仮置きするための「仮設ゴミ置き場」を設置。ゴミをここに集め、年2回程度業者に処分させてきた。ここはあくまで、散在していたゴミを処分まで当面仮置きする所で、投棄場所ではなかった。だが、ここを自由に粗大ゴミを捨ててよい場と広く学生が勘違いする一方で、大学側もそれを見過ごしたため、不法投棄の規模が大きくなったとみられる。事実、一の矢宿舎に住むある学生は「(仮設置き場には)いつもゴミがあり、捨てていいと思っていた」と話す。

これらの解決のために置かれたのが今回の鍵付きゴミ置き場だ。ゴミは大学が回収するが、鍵付きなため外部の人間の不法投棄を防げる。その場合、ゴミの量や処分費の減少も期待される。だが宿舎に住む複数の学生が「ゴミ置き場の新設を知らなかった」と話すように、その存在を知らない学生は多い。大学が、こうした場所に粗大ゴミを捨てるとかえって不法投棄を誘発する恐れもある。

一方、問題が解決しない原因の一つに筑波大生のモラルの問題があるとも思う。

古くは1988年、つくば市では春日3丁目の住民が大学側に苦情を訴えている。付近に住む筑波大生がゴミ出しマナーを守らず、路上にゴミが大量に放置されたためだ。また92年4月には市内のゴミ焼却場の老朽化から市は1週間、ゴミ回収を停止。市はこの期間中はゴミを出さないよう市民に強く求めたが、筑波大付近には、学生らが出した大量のゴミが積もった。

このような意識が現在も続いていたら大問題だ。

不要になった家具や家電は後輩に譲るなど有効活用もできる。「数年しかいないから」などの短絡的な気持ちで、住む街や大学を汚していないだろうか。もう一度考え直してほしい。

（日本語・日本文化学類3年）

筑波時評

ギャンブル問題

深刻な日本のギャンブル依存
IR法契機に問題意識を

上市秀雄（うえいちひでお）**准教授（意思決定・認知心理学）**
シス情系・准教授。1999年東京工業大学大学院社会理工学研究科修了、博士（学術）。最高裁判所事務官、東京工業大学大学院社会理工学研究科助手などを経て、2013年より現職。

昨年12月15日に衆院本会議で、統合型リゾート法（通称IR法）が自民党や日本維新の会などの賛成多数で可決、成立しました。この法律は通称カジノ法とも言われ、宿泊施設や会議場などにカジノを併設することができるようになります。

IR法で最も重要視されていることの一つはカジノなどによる地域振興を含めた経済波及効果、もう一つはカジノができることによる治安の悪化やギャンブル依存症の問題です。私が昨年末に170数名の大学生に対して行った調査では、IR法に賛成あるいはやや賛成と回答した人は、男性71%、女性43%、反対あるいはやや反対と回答した人は、男性27%、女性49%という結果でした。賛成、反対どちらの意見の人も、IR法のメリット、デメリット両方の意見を持っており、メリットがあるから賛成、デメリットが大きいから反対という単純なものではありませんでした。

経済波及効果については専門外なので、ここではギャンブルの問題について考えたいと思います。ギャンブル依存症に関しては、2014年に厚生労働省が発表した数値では、日本の成人約5%、推計500万人がギャンブル依存症である可能性を報告しています。もちろん本当の依存症はこれよりも少ないと考えられますが、ただそれでも諸外国では1~2%程度であることから考えると、多いと思われます。

諸外国と比較し、日本でギャンブル依存症が多い理由の一つは、毎日手軽にできるパチンコ・パチスロ店や雀荘などのギャンブル場が町中にあふれていることと考えられます。これらは遊技ということになっていますが、実際は簡単に換金することができます。またギャンブル依存症の治療に来る人の多くは、パチンコ・パチスロに起因しているという報告もあります。ギャンブル依存症に関しては、現在日本はすでに深刻な状況にあるといえます。

いまのところIR法では、町中至る所にカジノ併設施設を建設するということは想定していないようです。よって、私の予想ですが、カジノ施設がいくつかできたとしても依存症の人たちは劇的には増えないと考えています。もちろんカジノ施設ができることによるデメリットはあります。ただそれよりも、今回のIR法によってギャンブル依存症に対する一般市民の認知が高まったこと、ギャンブル依存症対策法案も国会に提出されることなどから今現在ギャンブル依存症に苦しんでいる人たちにとっては、よい影響も多いのではないかと思います。

IR法の具体的な内容についてはまだ決まっていません。ギャンブル依存症に関する治療・予防のみならず、遊技場の換金問題、非合法組織の介入、マネーロンダリング、治安の維持、地域振興など、具体的な内容がどのようになるのか、皆さんも注目してみましょう。

反射鏡

受けて良かった授業

新学期を迎え、どの授業を履修しようかと考えるこの時期。昨年度にさまざまな授業を履修してきたであろう筑波大学生が特に「よかった」と感じた授業はどのようなものなのか。第三エリアや第三エリアで聞いた。

（鈴木瑞穂＝人文学類2年）

【日日3年・男性】
「日本の社会と民族演習」
日本人の死生観について学んだ。また、グループを組んでお墓などについて調べた。この授業がきっかけで卒業論文のテーマを決めることができた。

【生物2年・女性】
「ストレスとうまくつき合おう」
普段から呼吸法を決めておくと発表の場などで緊張しなくなることなど実生活に役立つ知識を学ぶことができた。今後、実践していきたいと思っている。

【比文2年・女性】
「ビジュアルデザイン概論」
講義中に専門用語を使わずにデザインの説明をしていたため、芸専でない学生でも受講しやすかった。受講したことで周りの広告やパッケージの見方が変わった。

【資源2年・女性】
「基礎数学Ⅱ」
数学が実生活でどのように活用や応用がされているかを学んだ。ユニークなキャラクターの先生が分かりやすく説明していたため、楽しかった。

【応理2年・男性】
「日本とはなにかⅡ」
沖縄の家の造りが伝統的なものではなく、実は意図的に造られたものであるなど日本文化の多様性について学んだ。自分が理系であることから、あまり日本文化に触れる機会が無く、知らないことも多かった。

【社学2年・男性】
「政治外交史」
20世紀以降の政治外交史をその時代の映画などの映像を通して多角的に学んだ。近代史が現代につながっていることを実感できた。

【比文2年・女性】
「比較宗教学概論」
難民の受け入れ問題や現在社会で起きている宗教紛争の背景、ムスリムファッションの変容などを学んだ。宗教を通して現代社会への意識を持てた。

【社学3年・男性】
「オリンピック」
オリンピックの歴史や出場するアスリートだけでなく運営や世界に広まった経緯などをリレー形式でさまざまな先生が教えてくれたので多角的に学ぶことができた。

【人文2年・女性】
「哲学通論」
時代の流れにそって哲学者の思想を追体験することで、「哲学することとはなにか」を考える授業。最後の授業での「哲学する能力は一度身につけると一生忘れない」という先生の言葉を忘れることができない。

【人文2年・男性】
「国語Ⅲ」
ブックレビュー〟を執筆した。テーマを自由に設定して国語Ⅰ・Ⅱで習得した技術を実用できた。

イラスト＝佐々木悠里さん（人文学類3年）

合格者のよろこびの声

筑波大学一般入試の前期日程の合格発表が3月7日に行われ、1445人が合格し歓喜の声を上げた。長く厳しい受験勉強を終え、晴れて筑波大生となる合格者に、掲示板前で受験期の苦労や春からの大学生活への期待などを聞いた。（佐々木悠里＝人文学類3年、秋田耕平＝社会学類2年、佐藤巧基＝物理学類2年）

【人文1年・男性】
私立大の受験に落ち、不安な思いで発表を見に来た。また合格した実感がなく、4月からの大学生活は考えられない。

【社学1年・女性】
絶対落ちると思って発表を見に来たが、掲示板に番号を見つけ、言葉にならないくらいうれしい。キラキラした大学生活を目指したい。

【国総1年・男性】
合格できてうれしい。受験はあっという間だった。大学生になり、新しい環境に早く慣れ、勉学に励みたい。

【物理1年・男性】
合格して一安心。日頃の努力が報われた気がする。大学ではサークルに入り、友人を多く作りたい。

【知識図書1年・女性】
筑波大に合格し、ようやく受験が終わってほっとした。1年先輩の彼氏が北海道大に在学しているので、国立大カップルになれて幸せだ。

【社工1年・男性】
独学で数学Ⅲを勉強し、試験に臨んだので難しかった。合格したのはうれしいが、まだ実感がない。

【医学1年・女性】
憧れの筑波大に合格できて、とてつもなく幸せ。勉強に課外活動に充実した大学生活を送りたい。

【エシス1年・男性】
浪人生活の1年間は長く、つらいこともあったが、その苦労が実ったと気がする。サークルに入り、大学生活を楽しみたい。

【体専1年・女性】
浪人して1年間、努力しても結果がついてくるとは限らないと言われていたので合格できてとてもうれしい。新たな出会いを通じていろいろなことをしてみたい。

【応理1年・男性】
甲子園を目指して練習していた時に比べると辛くはなかった。高校時代にけがをしたので運動はできないが、やりたいことを見つけたい。

【知識図書1年・男性】
センター試験で7割しか取れず受かると思わなかったが、2次試験で挽回して合格できたのでとてもうれしい。大学生活を楽しみながらもしっかり勉強したい。

【体専1年・女性】
センター試験後は合格するとは思わなかったが、実技試験に力を入れて合格する望みが少しあったので本当にうれしい。柔道部に入って活躍したい。

【国総1年・女性】
自分は推薦入試に落ちて友達は推薦入試で合格していたのでプレッシャーを感じていたが、合格できたのでよかった。英語や世界史が好きなのでたくさん学びたい。

舞踊研究室 卒業ダンス公演

300人が創作ダンス披露

「君の名は。」の世界観も表現

体育専門学群の舞踊研究室が主催する卒業ダンス公演が2月8日、筑波大学中央体育館バスケットボール場で行われた。約400人が訪れ、ほぼ満席となった観客席からは、演技の学生らに向けて手拍子や声援が送られ、会場は盛り上がりを見せた。

手鏡を持ち演技する学生たち（2月8日、中央体育館バスケットボール場で）

公演には、筑波大の体育専門学群開設の授業「ダンス実技理論実習」の受講生や筑波大のダンス部員など約300人が出演し、創作ダンスを披露した。

「ダンス実技理論実習」を受講した1年生と有志合わせて約70人の合同作品「君の名は。～時間と空間を越えてここに出逢ったオレたちのキセキ～」では、昨年大ヒットした映画「君の名は。」の世界観をダンスで表現。「彗星接近」や「前前前世」など8つの場面を展開した。

「彗星接近」は同映画の彗星が落ちてくるシーンの、宇宙の幻想的な雰囲気をライトを使い表現した。「前前前世」では同映画の主題歌に合わせたダンスを全員で披露。会場は大いに盛り上がった。

公演の最後には、4年生有志が「絆ぐ―一度とない現在をかたちにして―」を披露した。現実と理想のギャップをテーマにした作品で、総勢43名が入れ替わりながら出演。男女別で踊る場面もあり、女子のみが踊る部分では手鏡を片手に持ち「女子」を目指す偽りの自分を演じた。

公演の実行委員長である江上万絢さん（平成28年度体育専門学群卒業）は、「もう同じメンバーで踊ることはないと考えると寂しい。ダンスという、全く同じものは二度作れない、はかない現象を仲間たちと作り上げられ、また大勢の人にその瞬間に立ち会ってもらえてうれしかったと話した。

（橋野朝奈＝日本語・日本文化学類3年、写真も）

版画の力作が集う

さまざまな技法を駆使

芸術専門学群、大学院芸術専攻の版画研究室の学生や教員の作品を展示する「版の上にも8年」が3月6日から11日まで、文房堂ギャラリー（東京都千代田区）で開催された。

2月に行われた「筑波大学芸術専門学群卒業制作展」で最高賞の筑波大学芸術賞を受けた木村洋輔さん（平成28年度芸術専門学群卒業）の作品「土の国」「空の国」「木の国」を含め約30点が展示され、多くの来場者が会場に足を運んだ。

市川絢菜さん（平成28年度芸術専攻修了）は「快活／明朗」「カイカツ／メイロウ」を出展した。「シルクスクリーン」という技法を使った作品で、鮮やかな黄色を背景に大きな人の顔が描かれている。

市川絢菜さんの作品「快活／明朗」「カイカツ／メイロウ」（3月8日、文房堂ギャラリーで）

多くの来場者の目を引いたのは有舟睦さん（芸専3年）の作品「plasma」。植物の細胞がテーマで、細胞片を顕微鏡写真の実物よりいかに奇麗に表現するかにこだわったという。防食処理を施した銅板を針で削り、腐食させることで細かい線を表現する「エッチング」と、銅板を部分的に腐食させることで色の濃淡を出す「アクアチント」の2つを組み合わせ、制作した。

有舟さんは「植物はほかの絵画でもテーマになりやすいが、細胞という少し変わった視点から制作した。細胞片の一つひとつを細かく書き込み、表現することができた」と話した。

（鈴木瑞穂＝人文学類2年、写真も）

応援部WINS 第5回桐華祭

筑波大学応援部WINSの公演「第5回桐華祭」が1月22日、つくばカピオホール（つくば市竹園）で開催され、約340人が来場した。

同部は結成から10年。節目の年を迎え、「志」というテーマで公演に臨んだ。部員全員がWINSを支援してくれる人への感謝の気持ちを持つという思いをテーマに込めたという。

公演は3部構成。「筑波大学応援歌」や「野球応援メドレー」といった応援の定番曲のほか、人気アニメ「ジョジョ」シリーズの主題歌の「Butterfly」などの有名曲を、息のあった力強い踊りと声で力演。バンドの雄大な音色も加わり、観客は大いに盛り上がった。

主将の高浦裕太さん（社学4年）は公演後、「今回の公演で自分は引退するが、後輩たちには『応援で筑波大学を元気にする』というWINSの精神を受け継ぎ、頑張ってほしい」と話した。（前谷裕一）

市川で能を披露

筑波能・狂言研究会は、3月31日に葛飾八幡宮（千葉県市川市）で行われた、同八幡宮の33周年式年大祭に出演し、能を奉納した。定番曲の「猩々」の一場面など、能の6演目を演じた。（田中開、16面に関連写真）

絶対音感

M.A

無絃塾

芸の道に終わりなし

三味線や琴、太鼓の演奏や唄、舞踊などを披露する津軽三味線倶楽部無絃塾の卒業公演が1月22日、ノバホール（つくば市吾妻）で行われた。無絃塾の卒業生を含む約50人が出演し、21曲を演奏した。

公演は「津軽三味線じょんがら節曲弾き」で幕を開けた。卒業生と無絃塾の講師が昨年作成した、津軽三味線だけで演奏するオリジナル楽曲。強弱が目立つリズミカルな曲調が特徴だ。「オリャー！」という気迫のこもった掛け声を皮切りに演奏が始まった。卒業生ら13人が息を合わせて鳴らした音の波は、鋭い。だが激し過ぎず、深みがある津軽三味線の音色が会場全体を包み込んだ。代表の大井裕介さん（平成28年度人文学類卒）は「心をそろえた出だしだった」と話す。

中盤、それまでの鋭いメロディが突如繊細に。音量が小さくなるが、13人の演奏者らは「気」を合わせ、曲の変わり目を見事に表現していた。

見せ場は中盤から終盤だった。演奏者らの掛け声が徐々にヒートアップする。それと共に徐々に大きくなる音量。日本の伝統芸能には静かなイメージがあるが、ここでは伝統芸能が内に秘める「動」「激」の部分を見事に演出していた。盛り上がりの中、卒業生の後方の幕が開き、三味線を手にした3年生以下の部員が加わる。津軽三味線特有の、絃楽器であるつも撥を叩き付ける打楽器的な演奏が続く。華やかで力強い「若さ」を感じた。総勢60人の大合奏で「津軽三味線じょんがら節曲弾き」は終わった。

凛々しい表情で三味線を掻き鳴らす大井さん（右）（1月22日、ノバホールで）＝鈴木瑞穂撮影

第2部の演目「荒波」は、講師の一人である津軽三味線兼和太鼓奏者の井坂斗絲仁さんが、「旅立つ卒業生が、社会の荒波に負けないように」との思いから無絃塾の卒業生のために3年前に作曲した。

特徴は「チャッパ」という、小型のシンバルのような単音打楽器が加わること。卒業生の郡司祥子さん（平成28年度日本語・日本文化学類卒）と正木博佳さん（国際3年）が、チャッパを鳴らしながら舞台上をしなやかに舞い、音と踊りで観客を引き込んだ。

それは荒波のような苦難を前にしても明るさを忘れない人々の姿を思わせた。郡司さんは「3年間チャッパ一筋で練習してきた。最後に思い切り踊ることができた」と話す。

「荒波」はその後、三味線と和太鼓の合奏へ。太鼓の撥を上下左右に大きく動かし、激しい波を表現する。

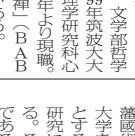
通常、我々は「音」を聴覚で「聞く」と考えられる。だが、それは誤りだと知った。視覚を含め、五感で「聴く」のだ。

公演後、大井さんは「無絃塾での経験と仲間は宝物。『芸の道、初めあって終わりなし』との言葉を胸に、卒業後も三味線を続けたい」と話した。約2000人が来場し立ち見が出るほどの盛況だった。

（吉永真理＝生物学類2年）

原点 GEN-TEN

「希代の武術家」に魅せられて



湯川 進太郎（ゆかわ しんたろう） 准教授（心理学）

人間系・准教授。1994年早稲田大学第一文学部哲学科心理学専修、99年筑波大大学院博士課程心理学研究科心理学専攻修了、06年より現職。著書に「空手と禅」（BABジャパン）などがある。

彼はジークンドー（截拳道 Jeet Kune Do）の創始者であり、希代の武術家である。古今東西の哲学を読み漁り、武術とともに思想的にも世界中の人たちに多大な影響を与え、死後40年を超えたいま与え続けている。

彼は1940年のサンフランシスコで、広東演劇の俳優であった父親とドイツ人とのハーフであった母親との間に生まれた。よって彼はアメリカ国籍を持つアメリカ人なのだが、このことが後に、大きな希望と苦悩をもたらす。

家族とともに香港に戻った彼は、俳優の息子ということもあり、いくつかのドラマや映画に子役として出演した。しかし、何不自由ない生活はやがて彼を手のつけられない悪童に育てた。喧嘩に使えるからと、13歳から詠春拳の達人・葉門（Yip Man）に弟子入りしたが、これが後に彼の人生を変えていく。

悪童ぶりに頭を痛めた父親は、息子の彼をサンフランシスコに放り出した。アルバイトをしながら、やがてワシントン大学の哲学科に進んだ。

そしてこの頃から、かつて学んだ詠春拳をベースとする中国武術を教え始める。道場の名を「振藩國術館」という。後に大学を中退し、自ら理想とする武術を求め、武術研究に専念することになる。それがジークンドーである。その奥義は、「以無法為有法、以無限為有限」である。

形にとらわれない自由な生き方。それは単なる好き勝手という意味ではない。私たち人間はついついと、社会の規範に縛られ、他者からの評価を恐れ、自分の過去と未来にがんじがらめになっている。まるで自動化されたロボットか奴隷のようである。

自律した自己として世界を眺め、自ら自覚的に選択し、自由かつ創造的に自己実現するためには、形から離れることが求められる。友よ、水のごとくあれ。

彼は自身の武術・思想であるジークンドーを世に広めるべく奔走した。その一環として、アメリカのTVドラマに出演し、鍛え上げられた肉体と技術、そしてその哲学を披露した。アメリカ国籍を持つアメリカ人である彼は、この後もアメリカのTVや映画に出ることを望んだが、それは叶わなかった。ドイツ人のクォーターという端正なマスクだが、見かけは東洋人であることが、その夢を砕いた。

香港に戻った彼は、主演映画を連発してヒットさせる。そしてハリウッドが動いた。怪鳥音とヌンチャクで五大陸に衝撃を与えた主演映画「Enter the Dragon」は、自身初のアメリカ・ハリウッド映画。だが公開時、彼はすでに死んでいた。享年32歳。

私の研究は、暴力映像研究に始まり、怒りの制御、そして今はマインフルネスだ。それらはすべて、彼に彩られている。

名刺一枚、誰にでも会える。

筑波大学新聞

編集会議

共同利用棟にて毎週月曜１８：３０から

一の矢・平砂共用棟・中央図書館前に

１８：１５集合　会議後はご飯に行きます！

TEL:029-853-6699　MAIL:shinbun@un.tsukuba.ac.jp　Twitter:@ut_shimbun　Facebook: 筑波大学新聞

新　人　記　者　募　集

「読者」から「記者」へ

編集長
小宮山 瑛生

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。この文章を読んでいるということは、この筑波大学新聞を手に取って、開いていただいているのでしょう。ありがとうございます。

この文章を考えるにあたり、私も一昨年の自分を思い返しました。期待と不安を胸にやってきた未開の地つくばで、この新聞は貴重な情報源であったことを覚えています。特に今号にも載っているつくばマップは大変お世話になり、自分の住む周辺には何があるのかと新聞片手につくば散策をしたのは良い思い出です。

そんな私は今、筑波大学新聞で編集長として活動しています。この文を読んで少しでもこの新聞、そしてその活動に興味を持っていただければ幸いです。

筑波大学新聞の特徴として挙げられるのは、その自由性と記事の多様性ではないかと思います。御覧のとおり筑波大学新聞には、学内総合、学生生活面をはじめ、スポーツ、学芸、オピニオンなど毎回多くの記事を掲載しています。その中には必ず自分の興味を持てる題材があるはずです。自分の興味にあった事柄を自由に取材できる新聞の活動は非常に楽しく、充実したものになることを保証します。また、新聞の活動をしていないと出会えなかった多くの方に会うことができます。そうして作られる人間関係も、記者にとって大きな財産になるでしょう。

筑波大学新聞は年に7回、毎号約2万部を発行しています。学内はもちろん、市役所や病院、全国の大学などに配布しています。時には地域の事柄を取り上げ、地域紙としての役割を担うこともあります。

そんな大学新聞の記者は未経験で始めた人がほとんどです。取材や紙面の編集のほとんどは学生が行いますが、元記者であり経験豊富な先生が指導してくださいます。もちろん先輩方も新入記者を優しくフォローしてくれますよ。

今、この文を読んでくれている「読者」の中から多くの「記者」が編集室を訪れてくれることを心待ちにしています。

（社会学類3年）

活動の幅 無限大

本紙 OB
平嶋 健人さん

「記者はこの世で最も面白い商売」。入学直後に読んだ大学新聞に、こんなうたい文句があったのを覚えています。その時はちょっと胡散臭いな……と、半信半疑でしたが、今ではそれがあながち的外れではなかったと感じています。

「面白い」と言ったって価値観は人それぞれじゃないか、と批判が来そうですが、大学新聞の魅力は小宮山編集長が言うように「自由性」。私は何より活動の仕方が自由だと感じます。

文章が苦手でも、カメラ好きなら写真で紙面に貢献できますし、絵が趣味ならば4コマ漫画を描いたってよい。サッカー好きなら、蹴球部の「番記者」として大会を取材し、観戦記を書くのも面白い。実際に練習に参加して体験記を書いたり、スポーツ工学の専門家に取材したり……。記者の活動の幅は無限大です。

やりたいことがないかも？心配ありません。興味関心・好奇心、いくばくかの行動力さえあれば、どんな分野でも取材できます。

大学新聞の活動はやりがいのある仕事でもあります。

2013年から2年近くかけて連載した「つくばに街灯をキャンペーンでは、街灯が未整備だった大学周辺の道の危険性を問題提起。大学や市役所、警察署への取材を続けました。その結果、夜道でわいせつ事件が相次いだ筑波技術大学（つくば市春日）脇の道路に13本の街灯が設置されたほか、つくば市により街灯問題を話し合う協議会が設置されました。「明るくなり安心した」という住民の声を聞き、「社会を動かす」記者活動の醍醐味、やりがいを感じた連載でした。

この紙面を見て「本当に面白いの？」と、半信半疑のあなた。批判精神は記者の必需品です。まずは、編集室に来て、先輩に〝取材〟してみてください。僕だってそうでしたから。（平成28年度社会学類卒＝現日本経済新聞記者）

新入生応援企画
筑波大 魅力的な施設たくさん

筑波大学内には、便利で学生が気軽に利用できる施設が数多く存在することをご存じだろうか。今回はそうした施設の中でも、本紙おすすめの3カ所を取材し、それぞれの概要や利用方法を紹介する。春の一日、学び舎の興味深さ、奥深さに触れてみては……。（越智小夏＝比較文化学類、徳永翼＝日本語・日本文化学類、秋田耕平、石川泰行＝社会学類）

その他おすすめ施設の利用方法

- トレーニングルーム
- 野生の森（バーベキュー場など）
- 屋内プール

→講習や説明会に参加後、利用可能

- アートギャラリーＴ＋

展覧会開催希望者はスタッフにメールで申請

- 保健管理センター

予約なしで内科・歯科・整形外科を無料で受診可

平日 9時～12時15分／13時15分～17時

データを作品として形に

Openfab 創房

室内には3Dプリンターが6台ずらりと並ぶ（2月28日、Openfab創房で）＝秋田耕平撮影

入り組んだ第三エリアの一角にあるのが「Openfab 創房」だ。情報学群と大学院のCS専攻が共同で運営する工作室で、コンピューターで作ったデータを、作品として形にするための場として、一昨年の10月にオープンした。

工作室には3Dプリンター6台、レーザー彫刻機、3Dスキャナー、塗装ブース、はんだごてなどの電子工作ブースが設けられている。

工作室に入って最初に目につくのは3Dプリンター。1台数十万円する最新鋭機を導入しており、最大約15㌢四方で細部まで精巧な作品を作ることができる。3Dプリンターが6台も並ぶ環境は、企業や研究所でもめったにないという。記者が取材した際には、学生が高さ3㌢ほどのモアイ像の模型を作成し、約1時間半で完成させていた。工作室内には3Dスキャナーがあり、これで読み取った立体物のデータを出力することもできる。

工作室の奥にあるレーザー彫刻機では紙や木材、アクリル板などに文字や絵などを彫刻、切断できる。取材の際、製作した横10㌢、縦2㌢ほどの「筑波大学新聞」の文字を刻んだ木札は5分ほどで完成した。レーザー彫刻機では木札のほかにも、コースターや看板なども簡単に作れるという。また、加工の難しいアクリル板も正確に切断できる。

学群生は誰でも利用可能

レーザー彫刻機は木材に文字を彫ることが可能（2月28日、Openfab創房で）＝秋田耕平撮影

この施設は週5回、学群生なら誰でも工作室を利用することができる「Welcome hour」と呼ばれる時間を設けている。この時間で1カ月に約30人が工作室を利用しているという。機械は材料費を除き、5分ほどで完成した。レーザー彫刻機では木札のほかにも、コースターや看板なども簡単に作れるという。また、加工の難しいアクリル板も正確に切断できる。

全て無料で利用できる。使いが分からない人には、常駐する学生インストラクターが機械の操作方法や設計図となるデータの作り方などを指導する。学生インストラクターの宮本崇さん（CS前期1年）は「利用者の中には月に何度も利用するヘビーユーザーも多く、3Dプリンターを多用して大きなフィギュアを作る人もいる」と話す。

施設にはほかに、プロジェクターも備えられており、芸術や情報の実習などで使われている。また工作室を貸し切り、作品の発表会などもできるという。宮本さんは「利用者の多くは自分の趣味のために活用しているので、新入生もぜひ利用してほしい」と話した。

キャンパス内に広がる田畑

次世代農業研究部門

ペデストリアンデッキを北に進み、一の矢学生宿舎を抜けると、のどかな田園風景が広がる。東京ドーム8個分ほどの広い敷地に、果樹園や田畑、牛舎などを構えるのは、つくば機能植物イノベーション研究センター（T・PIRC）次世代農業研究部門（旧農林技術センター農場部門）だ。

入り口から入って左手には、ビニールハウスやガラス温室がずらりと並び、花き類・トマトなどの栽培が行われている。そのさらに南側には、水田と果樹園がある。果樹園では、ナシやブドウなど約9種類が栽培されており、取材した際にはウメが奇麗な花を咲かせていた。

北に進み、麦が植えられている畑を過ぎると、牛舎が見えてくる。飼料を貯蔵する大きなサイロの前では牛が昼寝をしており、同じ大学内とは思えないほどゆったりとした時間が流れていた。

牛舎ではゆったりとした時間が流れていた（3月16日、次世代農業研究部門で）＝越智小夏撮影

農林技術センターは、農林学の実習と研究の場を提供し、農林技術を発達させる目的で、1973年に設置された。今年度から、センター再編に伴い、同センターの農場部門と遺伝子実験センターが融合する形で次世代農業研究部門に改編された。

同施設はこれまで主に、農学の実習と研究に使われてきた。生物資源学類生対象の実習はかりでなく、大学院生対象の教育のほか、学外の一般向けの公開講座も行われている。同施設で栽培されたそばを使用したそば打ち体験など、年間で約10回の講座が行われている。参加者は小学生から大人までと幅広く、人気の講座は定員がすぐに埋まってしまう。

またセンター本館の1階入り口では、月、水、金曜日の12時45分から、農産物を販売している。今年度は、トマトやナスなどの野菜9種類、果物6種類、米、しいたけ、花などを販売予定だ。

値段はスーパーなどと同程度だが、減化学農薬・減化学肥料で栽培された特別栽培農産物で品質がよいことから、売り上げは好調。筑波大学附属病院やBiVi つくば（つくば市吾妻）にある筑波大学サテライトオフィスでは隔週で、イオンモールつくばでは季節ごとに販売されている。

次世代農業研究部門は生物資源学類生以外にはあまり場所を知られていない。

旧農林技術センター長の戒能洋一教授（生環系）は、「もっと多くの学生にT・PIRC農場部門を知っていただきたい。四季折々の花が咲き、安全で美味しい農産物が生産・販売されている。新入生には、ぜひ一度足を延ばしてもらいたい」と話した。

VR技術で非現実世界を体験

エンパワースタジオ

第三エリアの西側にある、倉庫のような白壁の巨大な建物が「エンパワースタジオ」だ。同スタジオではコンピューターを用い、バーチャルリアリティー（VR）の空間を体感できる技術の実験・研究と、この技術を利用した作品が展示されている。

目玉は体育館のような広大な空間「ラージスペース」（高さ8㍍、幅25㍍、奥行き15㍍）。天井の12台のプロジェクターが壁と床に映像を映し出し、専用の3Dメガネをかけると映像が立体に見えるほか、天井の別な装置が人の動きを読み取るため、その動きに合わせ映像も変化。映像の中に入り込む感覚が得られる。天井からつり下げられたワイヤで体を固定すると、高い位置から鳥になった感覚も味わえる。

記者もバーチャル空間を体験したが、専用メガネをかけると、まず教会の映像が飛び出して見えた。そして歩き出すと、自分の動きに合わせて映像も変化していく。目の前の柱にぶかっと歩くと、柱の中に入れるなど、現実にはない体験もできた。

エンパワーメント情報学プログラムリーダーの岩田洋夫教授（シス情系）によると、一般にバーチャル空間の技術は一人で体験するものが多いが、ここでは広い空間を使うため、大勢の人が同時に体験できる。3月24日には仮想空間の中での学位授与式も行われた。さまざまな目的に利用できるとともにラージスペースの魅力だ。

VR技術で壁に映し出された教会の映像（2月21日、エンパワースタジオで）＝秋田耕平撮影

ラージスペースの横には学生や教員の作品が多く並ぶ。その中で目を引くのが高さ5㍍ほどのロボット「Big Robot」だ。

仮想空間での学位授与も

上部に乗り、そこで足を動かすとロボットも動き出すため、自分が巨人になったような感覚が味わえる。また、「キャリオット」という乗り物は、車輪に足を置き台車に座った操縦者が、車輪から伸びる手綱を引いて移動することで、犬ぞりに引かれたような動きを体験できる。

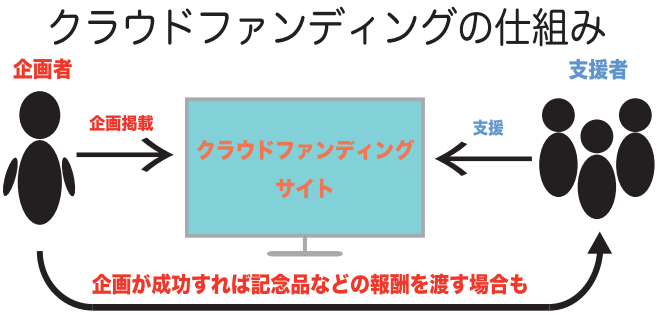
スタジオ横の研究棟には世界最大級の3Dプリンターやレーザーカッターも完備されており、学生はアイデアを自由に形にできる。岩田教授は「スタジオには体験を通じて技術を磨くことができる仕組みが整っている」と話す。取材時にはスタジオで学生が熱心に作品を制作していた。

一般公開は随時行われており、5月7日には学生らの作品が一般公開され、9月には全国からVRを体感できる作品が集まる展覧会「VRエキスポ」の開催も予定されている。

クラウドファンディング

【2面に関連記事】筑波大学は1月、図書館の資料購入費をクラウドファンディングで集める試みを始めた。学生の間でもイベントの開催費などを集めるケースも増えており、筑波大卒業生により運営され、大学関係者の支援のためクラウドファンディングを行うTFF（筑波フューチャーファンディング）も利用されている。活用例と今後の展望などを探った。（佐々木悠里＝生物学類、佐藤乃基＝物理学類、野朝奈＝日本語・日本文化学類、吉永真理＝人文学類、徳永翼、橋本文化学類）

ウェブ上で資金募る



クラウドファンディングとは

クラウドファンディングは、ウェブ上で不特定多数の個人から小口で資金を集める新たな資金調達手段。まず企画を立ち上げ、それに対する目標金額を設定、支援者を募集する。

支援者は企画が成功した場合、見返りに記念品などの報酬を受け取るケースもある。報酬には、▽物やサービスを受け取る「購入型」▽支援者が企画の利益から金銭で報酬を受ける「投資型」……などがある。報酬が一切ない「寄付型」もあるが、主流は「購入型」だ。

日本では2011年3月に国内初のクラウドファンディングサイトReady for が開設されて以降、同年6月にCAMPFIRE、13年8月にMakuakeが開設されるなど、市場は急成長している。多くの場合、これらサイトには集まった金額の5～20％程度の手数料を支払う。また資金調達の方式も各サイトで異なり、目標金額に到達できなくても資金を受け取れるAll-in方式、達成できないと受け取れないAll or Nothing方式の2つに分けられる。後者の場合、集まった資金は支援者に返金される。

各サイトを見ると、Ready for は貧困家庭の子どもに食事を提供する場を設ける企画「子ども食堂」など、社会貢献を行う企画が多く、利用者が多い。だが、手数料が17％と高いのが特徴だ。CAMPFIREはイベントが多く、手数料が13％となっている。またMakuakeは商品開発などの企画が多く、利用者はサイトを慎重に選ぶ必要がある。

15年9月には筑波大関係者を支援するTFFが本格的に運用を開始するなど、地域や学生を対象に特化したサイトも出てきている。TFFでは運用開始後1年半で約15の企画が提案され、全てが目標金額を達成している。

人の輪築く作業場

主な活用方法

■Tsukuba Place Lab

昨年12月にオープンの同施設（つくば市天久保）は、学生や社会人などさまざまな人々がアイデアを交換しながら働ける作業場（コワーキングスペース）。1日500円（学生300円）の利用料を払えば、約60平方㍍のスペースを自由に使える。現場には電源や無線LAN、プロジェクターや文房具、更にはこたつも完備。軽食も販売する。

代表の堀下恭平さん（平成28年度生物資源学類卒）は「さまざまな人とつながれる場を作りたい」と昨年7月にクラウドファンディングを開始。約2カ月で124人から100万円以上を集め、昨年9月から、築40年の建物で同施設の開設準備を始めた。壁塗りや床張り、家具などの内装もDIYイベントとしてウェブで参加者を集め、一緒に作り上げた。

堀下さんのクラウドファンディングでの資金調達は今回で3回目。これまで、ゴミ拾い活動を行う団体「NPO法人グリーンバード」のつくば市での拠点設立や、自身が大阪マラソンのチャリティーランナーとして出場する際の費用を募ってきた。

3月には同施設に置くトースターを購入するという「Labで最高の『美味しい！』を一緒に体験しよう！」という企画を実施。「皆でおいしいものを食べて笑顔になれた」という思いでクラウドファンディングを始めたところ、反響が大きく1日で目標額の3万円が集まった。

「このような『遊んだ』企画もやっていきたい」と話す堀下さんは、「クラウドファンディングは労力がかかるが、これからも活用したい」と言う。

建物の2階の一室を利用している（3月29日、つくば市天久保で）＝佐々木悠里撮影

さまざまなイベントを月に10回ほど実施＝Tsukuba Place Lab 提供

現在、同施設の利用者は社会人4割、学生6割で、学生の多くは筑波大生。利用方法も仕事や勉強で書類やプレゼンの作成などをしたり、その場にいる人と会話を楽しんだりとさまざまだ。また、大人数での会議やイベント時にスペースを貸し切ることも可能だ。

交流イベントも開催

交流イベントも月に10回ほど行われる。さまざまな業界のゲストを招いて対談する「Lab対談」や、つくば市の有名店のパンを参加者で食べる「パンフェス」は好評だった。ほかにもワークショップやヨガなど多種多様なイベントを実施している。

昨年9月の「盆 LIVE」は多くの来場者でにぎわった＝盆 LIVE 提供

企画への注目度が明らかに

■盆LIVE

和楽器やバンドの生演奏に合わせて盆踊りをする「盆LIVE」は筑波大学生が中心となって2015年に開始。研究学園駅前公園（つくば市学園南）で過去2回開催されたが、ここでも開催費の一部をクラウドファンディングで集めた。関係者によると、開催費用のほとんどは自己調達が可能だったが、イベントを広く知ってもらうためにクラウドファンディングを使った。これらは音響機材の充実に使われ、支援者にはイベントの手ぬぐいや煎餅などが送られた。

実行委員の福田哲郎さん（比文3年）は「支援が集まるかどうかで、企画がどれだけ注目されているか確認できる」。第1回の「祭り」はTFFを利用したが、第2回では開催準備中につくば拠点が設置されたCAMPFIREで資金を調達した。

第1回では3万円の募集額を全額達成。第2回では3万6千円の募集で5万2千円を集めた。クラウドファンディングを行うこともウェブ上で発信したという。

福田さんは「クラウドファンディングを通じて全く知らない人と交流が持てて、そこからまた別の誰かと知り合いになることができる」と話す。現在でも支援者と交流しており、相手のイベントに参加することもあるという。

難点は「集まる金額の予想ができないこと」（福田さん）で、主催者は成功時と失敗時の2つの予算を組む必要がある。イベントは開催直前までクラウドファンディングで資金調達を行うことが多いため、途中で募集金額を満たせばいいが、目標金額にたどりつかなかった場合は規模を縮小しなければならない。

つくば市には県外や外国からの移住者も多く、多様な背景を持つ人が暮らす。盆LIVEは、西アフリカの伝統的な太鼓や、JPOPのバンド演奏に合わせ盆踊りをすることなどで、参加者が一体となって楽しめるイベントを目指している。今年の秋には第3回の実施も考えており、やはりクラウドファンディングを活用予定だ。

活動伝わるきっかけに

■つくばけやきっず

医学群の学生を中心とした闘病中の子どもを支援する同団体は、遠足を企画したり病院内でクリスマス会を開くほか、2011年から「ゆめ花火プロジェクト」という活動を行っている。筑波大学附属病院小児病棟で闘病している子どもたちに自由に絵を描いてもらい、それを基に作った花火を打ち上げる。例年、雙峰祭の後夜祭に行い、その数は約20～30発になる。

同団体はサークル登録をしておらず、活動資金の獲得が難しい。これまで企業からの助成金や一般からの寄付金、筑波大の「社会貢献プロジェクト」からの支援金で活動してきたが、毎年安定した額の資金調達は難しかった。

こんな中、14年にTFFを立ち上げようとしていた染谷悟さん（平成21年度フロンティア医科学専攻修了）に誘われ、翌年からクラウドファンディングで資金を調達することを決めた。目標金額は予算35万円のうち10万円。支援者には手作りのはがきやカレンダーを届けた。目標額には約1カ月半で到達。集まった資金は花火の製作費用に充て、「ゆめ花火プロジェクトは成功裏に終わった。

代表の松崎汐那さん（看護3年）は「クラウドファンディングは自分たちの活動を知ってもらうきっかけにもなった。来年以降もTFFを利用したい」と話す。

小児病棟で闘病している子どもたちと交流するなど積極的に活動＝つくばけやきっず提供

つくばでさかん

挑戦する若者 応援したい

識者の声

一般的にクラウドファンディングはどう利用されているのだろうか。クラウドファンディング大手で、つくば市とも関係が深いCAMPFIREプロモーション部のたべともこさんに聞いた。（聞き手・吉永真理）

――クラウドファンディングを行う方法は

当社の特徴は敷居が低く、誰にでも始められること。利用方法は簡単で、会員登録を済ませるとすぐに公式ホームページで資金調達のためのページ編集ができる。

犯罪性がないかなどの審査を通過すると、すぐに資金調達を開始できる。家の中でパソコン一つあれば誰でも始められる手軽さがある。

――どのような運用例がありますか

イベントや商品開発など数万円から数千万円単位まで、幅広い額の資金調達が行われている。妻に寿司を買うために目標額を数万円にした例や、芸術作品の個展を開催するため、5千万円近く集めた例などさまざまだ。

――昨年3月に地方特化型の「CAMPFIREX LOCAL」を始めました。なぜつくば市を選んだのですか。

CAMPFIRE×LOCALは、クラウドファンディングを行う方が都内に集中する傾向がある中、地方の高齢者や若者にも気軽に利用していただきたいという思いから昨年の3月から開始した。

本紙の取材に応じるCAMPFIREのたべともこさん（3月15日、CAMPFIRE本社で）＝吉永真理撮影

つくば市の場合、ベンチャー企業に勤務していた渡邊ゆりかさん（つくば市在住）から「つくばにクラウドファンディングを広めたい」とお声がけいただいたことがきっかけでサービス拠点を設置した。つくば市はクラウドファンディングが盛んな印象がある。同サービスのつくば市のパートナーとなった渡邊さんには、クラウドファンディングについて相談することができる。

――つくば市での活用例を教えてください

映画制作や、西武筑波店跡へのオフィス誘致など10以上の企画がある。つくば市では弊社に積極的に質問をしたり、資金の調達中もホームページに近況報告をこまめに行う人が多い。

――つくば市での今後の展望は

つくば市は起業家や研究者が多く、彼らを模範として、若くても起業など新しいことに挑戦する人が多いのではないか。

こういった方々がより積極的な活動が行えるよう、つくば市でのクラウドファンディングの更なる活性化を目指したい。

視点

日本で本格的なクラウドファンディングが始まって6年。昨年11月に公開されたアニメ映画「この世界の片隅に」（MAPPA）はクラウドファンディングで制作資金を4000万円近く集めて話題を呼ぶなど、資金調達の方法としてクラウドファンディングはさまざまな分野で用いられるようになってきた。

識者に聞くと、つくば市は特にクラウドファンディングが盛んだという。本紙でも過去に、小型の人工衛星「結」、ボブスレーと円盤投げの2種目の選手で、自身の遠征費を募った日下望美（平成24年度体育専門学群卒）さんなど多くの活用例を取り上げている。

また今年1月には、筑波大とクラウドファンディング大手のREADYFORが提携し、研究費や書籍の購入費などを募ることが公表された。

第1弾として附属図書館が資料購入費などを募ったところ、目標額の6倍を超えたという。

だが、クラウドファンディングは、継続的な資金の募集ができるかどうか不透明な上、賛同者に経過を報告したり、報酬を準備するなど、労力もかかる。特性を十分理解した上で利用することが必要だろう。

（徳永寛）

睡眠と脳の関係解明

前頭前皮質が関係

ラザルス准教授

睡眠不足の時、甘いものなど高カロリーの食べ物につい手が伸びてしまう……。多くの人が経験するそんな欲求の原因が、筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構のミハエル・ラザルス准教授らの研究グループの下で解明されつつある。その研究結果は将来的に肥満の予防につながると期待されている。

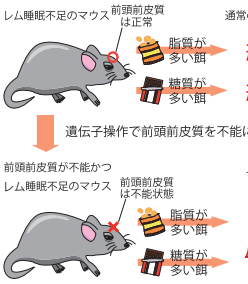
これまで、寝不足の人はそうでない人に比べ、脂質や糖分を多く含む食べ物の摂取が多くなる傾向が、実際にどの程度多く摂取するのか、なぜこの傾向が起きるのかは解明されていなかった。

そこでラザルス准教授らは、人間とほぼ同じ睡眠の仕組みを持つマウスで実験。まず通常の睡眠を取ったマウスと、ストレスを与えて浅い眠りと言われるレム睡眠時間を短くしたマウスを用意し、それぞれに通常の餌、脂質が多い餌、糖分が多い餌の3種類の餌を与え、その摂取量を比べた。

この結果、レム睡眠時間が短いマウスは、通常のマウスに比べ脂質が多い餌を約1・4倍、糖分が多い餌を約1・3倍も多く摂取することが分かった。

次にラザルス准教授らは、糖分を摂取した際に、特に働きが活発になることが知られていた「前頭前皮質」という脳の部位に着目。「前頭前皮質」が働かないマウスの方が圧倒的に摂取量が少なく、レム睡眠不足の際に糖質の摂取量が増加するのは「前頭前皮質」の働きが原因だと分かった。

これらの実験により、レム睡眠不足と糖質の過剰摂取との関連が一部明らかになったほか、肥満患者に睡眠の充実を促したり、患者の「前頭前皮質」の働きを薬で抑制すれば、糖質の過剰摂取を防げる可能性も出ている。ラザルス准教授は、今後は、今回の研究では解明できなかった（寝不足の際の）脂質摂取の欲求が脳のどの部位と関係するのかを研究したい」と話している。（秋田耕平＝社会学類2年）



ラザルス准教授が睡眠不足のマウスを用いて行った2つの実験

卒業生からの手紙

不思議な夢の街 つくば

漫画家 **横井三歩さん**

はじめまして。僕は筑波大学比較文化学類の卒業生で、漫画家をしている横井三歩と申します。自分がお邪魔したのは、かれこれ10年以上前です。ところが筑波大とは縁があるようで、昨年は筑波大学内で展覧会を開いてもらいましたし、今年も3月に筑波大東京キャンパスでカナダのアーティストとの交流会に参加させてもらいました。今回は、僕とつくばの関係についてお話ししたいと思います。

僕が初めてつくばを意識したのは4歳の時です。その日僕は壁のように大きなモニターを見上げていました。夕暮れの広場にドンと立つそのモニターには、自分の姿が映っていました。時は1985年。そこはつくば科学万博の会場でした。14インチのテレビしか見たことのなかった僕は、目の前の現実に目を丸くしました。また小学校に上がる前でしたが、テクノロジーが変えるであろう未来の暮らしを想像して胸が高鳴りました。

以来、僕にとってつくばは不思議な隣街であり続けました。洞峰公園のプールは学校のプールのような冷水ではなく温水で満たされていましたし、地質標本館にはキラキラ光る珍しい石が並んでいましたし、パン屋で買ったクルミパンには大好きなクルミが山ほど入っていました。大通りは見たことないほど広くてまっすぐで、街路樹は季節によって緑や黄色に色を変えました。こうした世界が僕をワクワクさせないわけがありません。筑波大への進学を決めたのは自然な成り行きでした。

そんなこんなで、僕は夢いっぱいで筑波大のキャンパスに足を踏み入れました。幸いなことに進学後も楽しく過ごすことができました。のんびりした空気が自分に合っていたようで、晴れた日には中央図書館前の芝生にゴロンと横になって考え事をするのが日課でした。こうした空想好きが高じて、やがて僕は漫画家になることを決意します。

卒業後も大学とは縁が続きました。大学の先輩に誘われてゲームソフト作りを手伝ったり、筑波大の先生に誘われて国際マンガコンペに参加したり、ここに挙げきれないほどです。

気付けば4つの時に万博で夢見た世界は現実となっています。巨大モニターやロボットは、もう昔ほど珍しくありません。しかし、つくばの街や大学は今も――夕暮れの広場で輝くあの巨大モニターのように――僕に新たな夢を見せてくれ続けています。（平成14年度比較文化学類卒）

筑波大学新聞

○主な学内配布場所

▽第一エリア＝1C棟2階　▽春日エリア＝7A棟2階（図情支援室前）
▽第二エリア＝2B棟2階　▽平砂宿舎＝共用棟2階
▽第三エリア＝3A棟1階　▽一の矢宿舎＝共用棟階段踊り場

そのほか図書館や書籍部などでも配布中

○入学者名簿も配布中

今号は学類ごとの入学者名簿も別刷で発行。
中央図書館配布分のみ本紙に挟み込んであります！
都道府県別合格者数や出身高校など各種データも盛りだくさん

子どもから大人まで参加
つくば体操フェスティバル

ペアでラートを使った「白鳥の湖」を披露する体操部（2月4日、つくばカピオで）

体操

運動することの楽しさを知ってもらうことを目的としたつくば体操フェスティバルが2月4日につくばカピオ（つくば市竹園）で開催された。22回目の開催となる今回は筑波大体操部のほか、地域の子どもから主婦、高齢者まで参加し、計29の演目が発表された。

体操部は新体操だけでなく、ひょうたんのような形のバランスボールであるフィジオロールやホース、ラートを使った多くの演目を披露。中でも目を引いたのはペアでラートを使った「白鳥の湖」。もともとのバレエ作品に沿って、2人がそれぞれ王子と黒鳥を装った白と黒の衣装を身にまとい、バランスを取りながらラートを回転させるなどの優雅な演技で観客を魅了した。

「ぐるぐるぐるぐるにゃぐるにゃ」はゴム製のホースを細かく切り、それをつないだ器具を使う演目。さまざまな形に変化する器具は観客を楽しませた。また、12人の出場者も白いシャツに赤い蝶ネクタイという衣装で息のあった動きを見せ、会場を盛り上げた。同演目で演出にも関わったほか、計8つの演目に出演した中田悠飛さん（比文4年）は「演技が点数化される大会とは違い、芸術作品として創作できるのもこのイベントならではのことだ」と話した。

企画した本会総監督（体育系・講師）は「今回は1つの演目の発表時間を前年までの5分間から3分間に短縮したり、観客も参加できる演目を組み込むように工夫した。このことで観客を飽きさせず、また体を動かす楽しみを体感してもらえるようにした」と話した。

来年は1月27日に開催予定。本会監督は「今年は市場者も紹介されるなど多くの人にイベントの存在を知ってもらえた。来年は更に多くの人に、体を動かす楽しみを知ってもらいたい」と話した。（鈴木瑞穂、写真も）

コナミオープン
平山・西脇2位

水泳

競泳のコナミオープンが2月18－19日に東京辰巳国際水泳場（東京都江東区）で行われ、女子50㍍バタフライでは平山友貴奈（体専4年）が26秒66で自己ベストを更新し、2位に輝いた。また女子100㍍背泳ぎでは西脇伶奈（同3年）が1分01秒59で2位になった。女子50㍍背泳ぎと100㍍背泳ぎで諸貫瑛美（平成26年度体育専門学群卒）と男子100㍍背泳ぎで金子雅紀（平成28年度体育学専攻修了）も優勝を果たした。

記者の目

今回、筑波大水泳部からは12種目8人が決勝に進出。3人が表彰台に登ったが、特に目立ったのは平山と西脇の2人だ。

平山は昨年の全日本学生選手権（インカレ）で、女子100㍍バタフライで3位入賞などの実力の持ち主。仙石泰雄監督（体育系・助教）が「今年に入りレベルは更に上がっている」と話すように、今回更新した自己ベストは今年日本で2番目に早いタイムだ。

一方、西脇の持ち味は後半の伸びだ。高校の時はそれを武器に女子100㍍背泳ぎと200㍍背泳ぎでインターハイ優勝も果たした。筑波大入学後は、実力が伸び悩み、昨年の夏ごろまではその強みを生かすことができなかったが、練習法などを変更したことが功を奏し、ムダのないフォームへと進化した。

今回のレースでは前半50㍍では8人中6位で、先頭の諸貫に0秒86の差があった。だが後半50㍍で2位まで追い上げた。

選手らの今後の活躍に目が離せない。4月の日本選手権はユニバーシアードの選考も兼ねている。（徳永翼＝日本語・日本文化学類3年）

日本学生選手権
ミドルディスタンス部門
増澤 後続に大差つけ優勝

オリエンテーリング

日本学生オリエンテーリング選手権大会が、3月18、19日にマロンガーデンマキノ（滋賀県高島市）で開催された。

大会では、約3㌔の道のりを走るミドルディスタンス部門と、3人でバトンをつなぐリレー部門が行われた。ミドルディスタンス部門（新人女子の部）で増澤すず（比文2年）が優勝、リレー部門（選手権の部）で筑波大女子が8年ぶりの準優勝を果たした。

オリエンテーリングは、山野に設置されたポイントを地図とコンパスを用いながら順番通りに通過するスポーツ。

会場となったマロンガーデンマキノは平坦で、従来のコースに比べて、地図を正確に読む能力よりも足の速さと体力が要求されたため、超高速レースが展開された。

地図を持ち走る増澤（3月19日、マロンガーデンマキノで）＝同部提供

リレー部門 8年ぶり準優勝

ミドルディスタンス部門に出場した増澤は、持ち前の足の速さでスタート直後から2位に大差をつけた。増澤は競技歴は1年足らずだったが、今回は平坦なコースが幸いし、ほとんど全てのポイントを1位で通過、17分35秒と2位以下に3分近く差を付けて圧勝した。

試合後、増澤は「インカレでの優勝は初めてなのでうれしい。今後も努力し続けたい」と話した。

2日目のリレー部門には、鈴木真美（地球4年）、増澤、山岸夏希（体専3年）が出場。

一走目の鈴木は、スタートで出遅れるも、第2中間地点で巻き返し、2位に1分半差をつけて1位でつないだ。続く増澤も、2位の高橋友理奈（東北大）にわずか9秒差で走り勝ち、1位で山岸にバトンをつないだ。

アンカーの山岸は、難所の多いコースが得意な選手。しかし、速さを求められる本大会のコース構成や、慣れない雪道が災いし、伊佐野はる香（東北大）に7分と大きく遅れ2位でゴールした。

山岸は試合後、「全員がベストを尽くせたと思うが、1位しか目指していなかったため非常に悔しい」と話した。（越智小夏）

瀬立 代表入り決まる
海外派遣選手最終選考会

カヌー

海外派遣選手最終選考会が3月27日、府中湖カヌー競技場（香川県坂出市）で行われ、瀬立モニカ（体専2年）が2種目で優勝した。大会後の選考で瀬立は今年度のパラカヌー日本代表に選ばれ、5月の世界選手権（ハンガリー）への出場が決まった。

瀬立は両端に水かきが付いたオールを使うカヤックと、片側に浮きが張り出したカヌーに乗り、片側だけで漕ぐヴァーの2種目に出場。リオパラリンピック後初のレースとなったカヤックでは、後続に7秒もの大差をつけて優勝した。瀬立は「最後までペダルに展開できた」と語り、手応えを感じさせた。また瀬立はヴァーでも優勝した。

しかし、今年度女子パラカヌーの代表は瀬立の1人のみ。「プレッシャーを感じている」と語る一方、世界選手権に向け「決勝進出やメダル獲得を目標に頑張りたい」と語った。（秋田耕平）

ヴァーのレースに臨む瀬立（3月27日、府中湖カヌー競技場で）＝本人提供

デンソーカップチャレンジサッカー
筑波大の選手活躍

サッカー

各地域の大学選抜と全日本選抜を加えた8チームによる対抗戦、デンソーカップチャレンジサッカーが2月17－19日に刈谷市総合運動公園（愛知県刈谷市）で開催された。

昨年12月にインカレを制覇した筑波大蹴球部からは、インカレ最優秀選手の中野誠也（体専4年）と三笘薫（同2年）が全日本選抜に、鈴木大誠（同3年）、鈴木徳真（同3年）、西澤健太（同3年）が関東選抜Aに選出された。他にも関東B・北信越選抜に4選手が選出され、総勢9名の選手が出場した。

試合では筑波大選手が活躍。中野は初戦で2得点を挙げるなど存在感を示し、優勝した関東選抜Aでプレーした西澤、鈴木徳真と共に大会ベストイレブンに輝いた。（小宮山瑛生＝社会学類3年）

お花見レガッタ
小原が4位

漕艇

毎春恒例のお花見レガッタが3月25－26日に戸田漕艇場（埼玉県戸田市）で行われた。シーズン開幕を告げるレースだったが、女子1000㍍シングルスカル決勝に出場した小原有賀（体専4年）は中間地点で首位と約3秒の差がつくなど苦戦し、4分05秒98で4位に終わった。

小原は「冬期トレーニングの成果を確認できた。インカレ優勝に向けて、気持ち新たに頑張りたい」と話した。（前名裕一＝社会学類3年）

鳥羽が優勝
大外刈りで有効奪う

柔道

全国体育系学生体重別選手権

全国体育系学生体重別選手権大会が、2月18－19日、講道館（東京都文京区）で行われ、男子81キロ級で鳥羽潤（体専3年）が優勝、66キロ級で佐藤晃輔（同2年）が第3位に輝いた。

鳥羽は、準決勝で平林直矢（東海大2年）と対戦。巴投げで技ありを獲得するも、後半で有効を取られるなど苦しい展開になった。その後も攻めきれず、互角の戦いとなったが、結局、逃げ切り勝ちを決めた。

決勝で鳥羽は、吉村豪（山梨学院大4年）と対戦。双方は序盤から積極的に攻める姿勢を見せたが、互いに技が決まらないまま、膠着状態となった。鳥羽は開始1分30秒で、指導を受けたが、3分40秒、吉村の右脇を抱えて大外刈りを仕掛け、有効を勝ち取って優勝した。

佐藤は、準決勝で阜川正起（日本体育大2年）と対戦。序盤から阜川の猛攻で指導を取られるなど劣勢となった。さらに、後半に入ってすぐ、小内刈りで押され技ありを取られ、そのまま相手の勢いを止めることはできなかった。佐藤はその後反撃に転じ技を仕掛けるものの決まらず、準決勝で敗退した。（加藤未悠＝社会学類3年）

記録ファイル

◆サイクリング　トラック　アジア自転車競技選手権（2月5－10日、インド）▽オムニアム・ポイントレース　梶原悠未（体専2年）＝優勝

◆柔道　◇グランドスラム・パリ（2月11日－12日、フランス）▽63㌔級　能智虎美（同4年）＝5位　◇グランプリデュッセルドルフ（2月24日－26日、デュッセルドルフ）▽63㌔級　津金恵（同4年）＝5位

◆おことわり　今回の「スポーツの顔」はお休みさせていただきます。

山中・館山の研修所
今年度から民間企業に委託
管理費の大幅赤字受け

今年度から民間企業が運営することになった館山研修所（2012年9月、千葉県館山市）＝本紙撮影

筑波大学が管理し、サークルや部活の合宿などに利用されていた山中共同研修所（山梨県南都留郡）と館山研修所（千葉県館山市）が、今年度から民間企業「R、projectに業務委託される。管理費の赤字を受けたもので、大学が改修工事を行った後、同社は館山研修所を6月に、山中共同研修所を7月に運営を開始する予定。

両研修所には、宿泊施設やセミナー室、グラウンドなどがあり、最盛期には年間5～6千人ほどの筑波大生や教職員らが利用していた。だが近年は3千人に満たず、年間1000万円以上の赤字が発生していた。

そこで筑波大は昨年12月に両研修所を民間企業に委託することを決定。入札で東京周辺で研修施設などの運営を行う「R、projectに業務を委託した。大学は今後、維持費を負担しないほか、同社から月10万円の賃付料を受ける。同社は今後、これまで通り部活の合宿の依頼などを受け入れるほか、グラウンドを人工芝に改修したり、新しいスポーツイベントを開催する。

学生生活課の土子昇課長によると、山中共同研修所は富士箱根国立公園の敷地内にあるため、規制が厳しく売却が困難。このため、民間企業へ業務委託することにしたという。土子課長は「民間企業のノウハウを生かし、維持と管理を行ってほしい」と語った。

また、土子課長は「館山研修所は目の前に海が広がり、マリンスポーツなどに最適。また山中共同研修所は、富士山や山中湖などが近いうえ、大規模なグラウンドもある。今後もこうした魅力を生かした運営を行ってほしい」としたうえで、「筑波大生には両研修所を積極的に利用してほしい」と述べた。

筑波大の研修所は、両研修所のほか、石打研修所（新潟県南魚沼郡）が設置されていたが、2013年に利用者の減少により売却されていた。（石川泰行＝社会学類3年）

国立台湾大の学生と交流
英語でプレゼンやテーマを発表

グループごとのテーマについて議論を活発に交わす筑波大生と台湾大の学生（昨年12月3日、国立台湾大で）

【台北で佐々木悠里＝人文学類3年、写真も】国立台湾大学（台北）への筑波大学生の留学促進を目的に、両大学は12月2～4日、台湾大で学生交流を行った。筑波大は台湾大と2015年「キャンパスインーキャンパス（C-iC）＝9＝」の協定を結んでいる。筑波大生20人が参加した交流の様子を現地取材した。

交流では筑波大生が台湾大の学生19人とグループに分かれ、さまざまなテーマについて発表。双方の学生らは事前にSNSなどで約1カ月議論を重ねており、発表は英語で行われた。

この中で、「ロボットと社会」のテーマで発表したグループは日本のロボットのアニメや漫画を紹介。ロボットと共に生きる社会の魅力と問題点をまとめた。

交流では筑波大生が台湾大の施設を見学したり、台湾大生が筑波大生を連れ、台北市内を案内する時間も設けられた。参加した西村勇輝さん（工シス4年）は「台湾大はキャンパスも奇麗で、学生も熱心。留学したくなった」と話した。交流は今後も継続的に実施される予定で、17年は派遣・受入の両方が行われる。

台湾大は1945年設立で、学生は3万人と台湾では最大規模。筑波大とは2007年に相互の学生交流を目指した協定を結び、継続的に学生交流を行ってきた。さらに筑波大は14年に台湾大に台湾オフィスを設置していた。

9＝キャンパスーインーキャンパス（C-iC）＝筑波大が海外の大学と結ぶ協定で海外協定校との授業の共有や、共同の学位プログラムを開発することなどが目的。現在、筑波大は5校と協定を結んでおり、23年までに13校に増やす予定。

4418人が巣立つ
平成28年度卒業式
国際会議場で開催

学長から学位記を受け取る卒業生（3月24日、つくば国際会議場で）＝岡田優太撮影

平成28年度筑波大学卒業式と筑波大学大学院学位記授与式が、3月24日につくば国際会議場（つくば市竹園）の大ホールで行われた。今回は2234人の学群生、2163人の大学院生、21人の理療科教員養成施設生が、暖かな春の陽射しの下で卒業、修了を迎えた。

例年、卒業式の会場は大学会館だが、今回は大学会館が耐震改修工事が行われているため、つくば国際会議場で実施。収容人数の関係から卒業式、学位記授与式ともに2回に分けて行われた。

永田恭介学長は式辞の中で「我が国で最も古い高等教育機関を創始とし、最も新しい国立総合研究大学である本学を巣立つ皆さんには、個人の幸せを超えて追及しなければならないことがあるはずだ」と述べた。

1回目の修了生謝辞では、教育研究科を修了した前田昌寛さんが、情報が次々と更新される現代社会の状況に触れた。この上で前田さんは「修了生一同、学び舎を後にしても、学び続ける姿勢に終わりはない」と述べた。

式の終了後には会場周辺で、在学生らが卒業生の門出を祝った。今年度から東京学芸大学院に進学する渡邉元宏さん（平成28年度人文学類卒業）は「進路の変更など紆余曲折はあったが、充実した大学生活だった。大学院でも勉学に励み、裁判官を目指したい」と話した。（益本健太）

附属図書館 新PV試写会

完成したPVを視聴する職員や学生（3月22日、中央図書館集会室で）

筑波大学附属図書館の魅力を学生や学外に伝え、来館の促進を目指すプロモーションビデオ（PV）の完成試写会が、3月22日に中央図書館集会室で行われた。PVは芸術専門学群の学生が制作したもので、試写会には附属図書館長の西川博昭副学長（学術情報担当）など図書館関係者や、制作に関わった筑波大生など約20人が参加した。

図書館では、2008年に同様のPVを作っていたが、その中で使われる携帯電話が旧式であるなど内容が古くなっていたため、3年前から新作を検討。学生の視点を重視したいという図書館側の要望から、新たなPVは奈良日向子さん（芸専3年）など芸術専門学群の学生3名が中心となり、昨年5月から約1年間かけて作った。制作には村上史朗助教（芸術系）が協力した。

この中で、村上助教は「時間がたっても色あせない作風を意識した」と発言。また、奈良さんは「映像の撮影は自分にとって初めてであり、最初は不安だったがさまざまな人の協力を得て完成したPVは長さ3分程度で、筑波大生が登場。「図書館の利用による大学生活の充実」をテーマに、学生が図書館に通う日常を描いたセリフは、切なく、背景に音楽が流れ続ける完成度の高い作品に、上映後には会場から大きな拍手が上がっていた。

試写会では、PV上映ほか図書館の職員が制作の経緯について説明。また、制作に関わった村上助教、学生らの作品解説も行われた。

この中で、村上助教は「PVは奈良日向子さん（芸専3年）など芸術専門学群の学生3名が中心となり、昨年5月から約1年間かけて作った。制作には村上史朗助教（芸術系）が協力した。

完成したPVは長さ3分「図書館の利用による大学生活の充実」をテーマに、学生が図書館に通う日常を描いたセリフは、切なく、背景に音楽が流れ続ける完成度の高い作品に、上映後には会場から大きな拍手が上がっていた。

試写会では、PV上映ほか図書館の職員が制作の経緯について説明。また、制作に関わった村上助教、学生らの作品解説も行われた。

画投稿サイト「YouTube」（https://youtu.be/UsjSrTwj7wA）などで公開されている。また、新入生のオリエンテーションや、学内の液晶ディスプレーなどを利用した電子看板などでも利用される。（益本健太＝人文学類2年、写真も）

一方、図書館の職員からは、「職員の立場から見ても、図書館のありのままの姿が描かれている」との感想が出るなど、賞賛の声が上がった。これに対し、PV制作に加わった横手「風」さん（芸専3年）は「公の場で感想を聞く初めての機会だったが、予想以上に好感触が得られてうれしい」と話していた。

同PVは4月1日から動画投稿サイト「YouTube」（https://youtu.be/UsjSrTwj7wA）などで公開されている。また、新入生のオリエンテーションや、学内の液晶ディスプレーなどを利用した電子看板などでも利用される。（益本健太＝人文学類2年、写真も）

一方、図書館の職員からは、「職員の立場から見ても、図書館のありのままの姿が描かれている」との感想が出るなど、賞賛の声が上がった。これに対し、PV制作に加わった横手「風」さん（芸専3年）は「公の場で感想を聞く初めての機会だったが、予想以上に好感触が得られてうれしい」と話していた。

同PVは4月1日から動画投稿サイト「YouTube」（https://youtu.be/UsjSrTwj7wA）などで公開されている。また、新入生のオリエンテーションや、学内の液晶ディスプレーなどを利用した電子看板などでも利用される。（益本健太＝人文学類2年、写真も）

海外危機管理セミナー
春休み前に注意促す

春季休業を前に海外渡航を計画している学生、教職員らを対象にした海外危機管理セミナーが2月2日に1日棟で行われた。

セミナーでは海外生活での危機管理、問題解決など）を行う「日本エマージェンシーアシスタンス」の江見裕明さんと、グローバル・コモンズ機構の山田亨助教（人社系）が登壇。江見さんは筑波大学と同社が契約している「OSSMAサービス」を紹介した。このサービスは海外へ渡航を希望する学生及び教職員向けで、生活相談や定期的な安否確認など、一般的な海外旅行保険では対応できない支援を行っている。

江見さんはこのほかにも、近年発生した事故やテロ事件にも言及。海外渡航の安全性をいかに高めるかについて語った。この中で、江見さんは健康状態を整えること、連絡体制の確認を行うなど、渡航前の準備についてアドバイス。「渡航の際には安全に関する認識を一度リセットする必要がある」とも話した。

一方、山田助教は海外に渡航する学生に対して、大学へ海外渡航届を提出することや、外務省の提供する海外安全情報など情報を集めるようアドバイス。これらを含めて、安全な渡航のための準備を行うよう呼びかけた。

セミナーに参加した学生は「春季休業中にグループで海外旅行を計画している。今回のセミナーで知ることも多く、海外渡航に関する心構えが変わったと思う。今日の話をグループで共有して安全な旅行にしたい」と語った。（小宮山瑛生）

日本人学生と留学生が同居

グローバルヴィレッジ　運用開始

4月から留学生と日本人学生が同居するシェアハウス型の宿舎「グローバルヴィレッジ」の運用が開始された。これに先立ち、オープニングセレモニーが3月27日に同宿舎の共用施設「コミュニティステーション」で行われた。

（越智小夏、徳永翼、16面に関連写真）

同宿舎は平砂地区にあり、11棟に500人が入居可能。4月からはそのうち7棟310室が運用を開始し、日本人学生218人と留学生41人が入居する。うち新入生は175人で、空室には秋入学の留学生らが10月に入居する予定。また、4棟190室は来年度から運用を開始する。家賃は月3万5800円で、管理は民間委託される。

同宿舎は「ユニット」と呼ばれる1つの部屋に5人が入居。1つのユニットには、キッチンやトイレの他に冷蔵庫やテーブルなどの家具・家電が備え付けられている共用のリビングと、ベッドや机、エアコンや本棚なども設置された個室がある。そのため、入居者は家具などを買いそろえる必要がない。また、掃除機なども共用施設で借りることができる。

共用施設「コミュニティステーション」は事務室のほか、プロジェクターなどが利用でき大人数で作業することが可能な学習スペースや、学生が利用できるキッチンなどもあり、「学生に多様な利用をしてもらいたい」（学生生活課）という。これらの施設の利用には予約が必要で、4月中に運用が始まる専用ウェブサイトや同施設の窓口で予約ができる。

宿舎のデザインに関わった山本早里准教授（芸術系）は、「学生が交流しやすいよう、学習スペースを一体化したり、外にベンチを置くなど工夫した。外装や壁紙はアクセント色を控えめに用いた多様性のある上品なデザインを目指した」と話した。

日常的に使う家具が並ぶリビング（3月27日、グローバルヴィレッジで）＝越智小夏撮影

茶道や華道体験も

セレモニーには教職員や学生など約150人が参加。和菓子和用し茶道や華道も体験した。茶道を体験したベントン・キャロライン・ファーン副学長（国際担当）は、「茶道は一つひとつの所作に意味があり、心が清まったように思う。日本文化に触れる良い機会になると思うので、留学生も積極的に設備を利用してほしい」と話した。

また、セレモニー後には新入生らも加わり、部屋を見学した。入居予定の女子学生は「一人暮らしが不安だったので、グローバルヴィレッジへの入居を決めた。思ったより設備がそろっていた」と話した。

全学計算機システム更新

一部サテライト室閉鎖も

閉鎖が決まり、パソコンが撤去されたB棟サテライト室（3月27日、1B棟で）＝秋田耕平撮影

大学のメールシステムの管理や計算機を用いて行う共通科目情報や各学類の授業のためのソフトウェアの提供などを行う全学計算機システムが3月21日に更新され、同システムが管理する学内の全約1100台のパソコンが新しくなったほか、大学から学生一人ひとりに配布されるメールアドレスが新しくなった。

全学計算機システムはこれまで、外部からサーバーを借りるリース契約で運営されていたが、昨年度で前回の契約が満了。これを機にシステムを更新した。

学術情報メディアセンター長の亀山啓輔教授（システム情系）によると、「システムが管理するパソコンが全て新しくなったため、更新後は初回の起動時を除き、起動時間が従来の半分ほどになった」という。

また、亀山教授によると、パソコンに内蔵されるソフトウェアも一部更新。Windowsのバージョンは「7」から「10」に更新され、各種アプリケーションソフトも基本的には最新版に更新された。

このほか、学生個人のパソコンから全学計算機システムにアクセスすることが可能な「リモートデスクトップ」という機能を使用する際、これまでは利用することができなかったMicrosoft Officeが利用できるようにもなった。

今年度から学生に配布するアドレスも変更された。従来は学籍番号の後につながるドメイン名が「@u」だったが、今後は「@s」アドレスが配布される。

「@u」アドレスでは、容量が3GBしかない一方、「@s」アドレスでは保存できるメールの容量が100GBとなった。

2年生以上はこれまで配布されてきた「@u」と新たに配布される「@s」の2種類のアドレスを持つことになるが、今年度の入学生からは原則として、「@s」アドレスのみを利用することになった。

学生に新たなアドレス配布

新アドレスの導入に伴い、学術情報メディアセンターは、「大学からそれぞれのアドレスに対し、違う内容のメールが届く可能性がある」と説明。2年生以上の学生には、どちらのアドレス宛てのメールについてもチェックするよう呼びかけている。

このほか、更新に合わせサテライト室も整備。同室では全学計算機システムが管理するパソコンやプリンターを、学生や教職員が自由に使用できるが、全室のパソコンを新調したほか、白黒とカラーの両方を印刷できるプリンターも整備した。これに加え、医学エリアなど利用者数が多いサテライト室では、パソコンの台数を増やした。

一方、これまで利用者数が少なかったB棟や文科系修士棟に設置された一部のサテライト室は閉鎖される。

亀山教授は「今回のシステム更新では使い方が変わった点が多く、はじめは使い慣れないなうが、使用する中で慣れてほしい」と語った。（石川泰行）

つくばゲームまつり開催

将棋などを通じて市民ら交流

真剣な表情で、将棋に似た中国のゲーム「シャンチー」に取り組む参加者（2月26日、BiViつくばで）

将棋や、将棋に似た中国のゲーム「シャンチー」など古今東西のボードゲームを通じて市民が交流する「つくばゲームまつり―将棋の古今東西―」が2月26日にBiViつくば（つくば市吾妻）で行われ、訪れた学生や主婦ら30人が対局を楽しんだ。同イベントは1月に発足した「つくばテーブルゲーム交流協会」が主催した。

今回のテーマは将棋。将棋の元となるゲームはインドで生まれ、それが広まるうちにチェスや将棋になっていった。同イベントでは、シャンチーや江戸時代に流行した「中将棋」など世界各地の将棋に似たボードゲームなどが9種類用意され、参加者は思い思いにゲームを楽しんでいた。

代表者の高野大さん（比文4年）が「ボードゲームは世代や国籍を問わずさまざまな人々が交流できるのが魅力」と語るように、シャンチーを知る中国人の留学生や地元の小学生なども参加し、和気あいあいとボードゲームを楽しむ人の姿が見られた。

参加した小学生は「普段から将棋をしているが、初めてシャンチーで遊んだ。相手の駒の動きを予測してゲームを進めることが難しかったが、面白かった。またやりたい」と話した。

同会はこれまで世界中のさまざまなボードゲームで遊ぶ「朝のゲーム会」と「夜のゲーム会」を、学内やTsukuba Placeで行ってきたが、より多くの人にボードゲームを通じて交流をしてもらおうと同イベントを開催した。

（鈴木瑞穂、写真も）

留学生の目

相手をおもんばかる国　日本

イム・ユチャン

日本という国に初めて来たときは、上は半袖で、下は長ズボンがちょうどよかった秋風が吹き始める2014年の秋だった。1人でコンビニに行ったときに聞こえた信号機の清雅な鳴き声が未だに心の片隅に残っている。それが日本という国の第一印象だった。

留学の前までは、ただ勉強のための留学だけを考えていただけ、留学先である日本の文化や、つくばという場所に対しては、真面目に考えた事はなかった。そのためなのか、ほんの小さな出来事一つひとつで、例えば信号機の鳴き声のような、つまらないと思われることが、私にとっては波が寄せてくるほどの強力で新鮮な経験だった。

日本で生活をしていて一番驚いたことは、他人に対する態度であった。

もちろん世の中にはほかの人に細やかな心遣いができる人や、いつも優しくしてくれる人はどの国にもいる。ただ、自分の周りの全員がそうである国は日本だと思う。

日本以外の海外で生活したことがないからかもしれないが、周りの人と会話するときに心が落ち着く国は、母国である韓国と、留学先である日本である。

大学に入学し、日本の生活に慣れようと、アルバイトを始めたり、サークルに入り、会話をする機会を増やした。バイト先で一緒に働いた人たちにも、サークルで一緒に活動した先輩方や後輩や、同期たちに共通していたのは本質的な優しさであった。

具体的な優しさの内容に関しては記憶力の限界で一つひとつを思い出せないが、確かなことは相手をおもんばかることを大事だと皆考えているということだった。

次に驚いたことは、人と人が対面しなければならない手続きが多く、そのため手続きにかかる時間が長くかかることだ。これは良くもあり、悪くあるのかもしれない。実際に時間が長くかかるほど綿密に検討するのではないかと思った時もあったが、終わってみれば簡単な手続きにも関わらずなぜこんなに長いのかと思った時もあった。

現代社会なのに、住民票の発行や、引っ越し後の住所変更、宿舎に関する手続きなど、その場に行かなければならない手続きが多かった。そのため、簡単にインターネットで発行したり、手続きをする手段がなぜないのかと思った時もあった。

ほかの国であるからこそ、異なる点が無数にある。そのことがその国の特徴で、留学生としてはそのような違いが良い刺激になっている。

その国の良い習慣があればそれを見習うことが、勉学のほかにその国で留学するもう一つの意味ではないかと思っている。そしてそれを見習うことができる点も留学生としての特権だと思う。

どの国へ留学しても、この特権をよく理解しよく使っていくことが、自分の留学生活のためになっていくと思う。（工学システム学類3年＝韓国出身、原文も日本語）

市民に愛され32年
ありがとう西武筑波店

跡地の活用方法決まらず

32年の歴史を誇る西武筑波店（つくば市吾妻）が2月28日に閉店し、営業最終日の同日、多くの人が同店を訪れ、別れを惜しんだ。

閉店時間の午後8時。間際まで各階で買い物をしていた客が次々に降りてくるが、その多くは、入口前から離れようとしない。結局、看板の照明が落ちきれ、シャッターが降り始めたのは8時30分頃だった。

「ありがとう！」。ゲートの前に居合わせた多数の客から声が上がる。中にはハンカチで目を抑える人の姿も。小さい頃から同店をよく利用したという筑波大学の女子大生（20）は「子供の頃は付近に大きなショッピングセンターがなく、買い物と言えば西武だった。子ども服を買ってもらったことを昨日のように思い出す。なくなってしまうのは寂しい」と話していた。

閉店を目前にたくさんの買い物客でにぎわう西武筑波店（2月28日、つくば市吾妻で）＝秋田耕平撮影

◆

同店を巡っては、跡地の活用方法は未定だ。建物を管理する筑波都市整備株式会社（同市竹園）によると、西武側から8月に閉店の知らせを受けた後、大手百貨店など約300社に出店を交渉したが、「結果は出なかった」という。今後について筑波都市整備の担当者は「立地に相応しいテナントを招致することで、つくばの中心から街を盛り上げていきたい」と話す。

一方で、昨年当選した五十嵐立青市長は跡地に職業体験型のテーマパークを開業させることを公約に掲げていた。だが、市役所の担当者によると現在は跡地周辺にどのようなサービスが必要か市役所内で議論を重ねている段階だという。

また、これらの動きとは別に筑波大学OBで投資家・起業家として活躍する常間地悟さん（平成25年度人文社会科学研究科修了）は、跡地をつくばで起業を目指す人が入居できるオフィスとして活用することを目標に掲げ、クラウドファンディングを11月から開始。だが、1月に目標金額の1000万円に到達しなかったため計画は断念されたままだ。

西武筑波店は1985年のつくば万博の開催と同時期に営業を開始。市の中心部のシンボル的存在だったが、近年は大型ショッピングセンターの相次ぐ開業で、売り上げはピーク時の半分と厳しい営業を強いられていた。（鈴木瑞穂、16面に関連写真）

海外での挑戦語る
海外武者修行支援プログラム報告会

海外で斬新な活動をする筑波大学の学生グループに資金援助を行う「海外武者修行支援プログラム」の帰国報告会が3月3日に総合研究棟Aで開催された。

同プロジェクトは海外留学支援事業「はばたけ！筑大生」の一環として平成27年度に開始。用途が決まっている一般的な奨学金とは違い、海外で活動を行う学生グループの自由な活動を支援している。上限200万円までで、希望学生は自らが望む活動の内容を学長らの前でプレゼンし、認められれば支援が決まる。

報告会には、フランスで現地学生と蜂の巣をイメージした的あてのおもちゃを作った団体や、カナダの学生と街づくりのワークショップを開いた団体など計17団体が出席。それぞれがスライドなどを用いて活動内容を報告した。

ケニアで橋の模型を作るワークショップを開いた毛利宏輔さん（構エネ2年）は「実際に現地に赴くことでそこの学生の得意分野などを知ることが多かった」と発言。また、「プレゼンが認められれば、奨学金の用途を自主的に決めることができる」と同プログラムの利点を語った。

河瀬眞琴グローバル・コモンズ機構国際交流支援部門長は「前回よりも企画の完成度が高くなったと感じる。学生には思った通りの成果が出なくてもいいので、制度を利用して挑戦をしてほしい。その延長線上で、仕事や生活の場として海外にも目を向けてほしい」と話した。

同プロジェクトには本紙も参加し、11月にロンドンで五輪・パラリンピックのレガシー（遺産）を取材した。記事を掲載した332号（12月5日発行）と333号（1月23日発行）はウェブでPDF版を閲覧可能。（徳永翼）

東日本大震災から6年
復興や現状を考える

東日本大震災から6年を迎えるに当たり、改めて復興支援の方法や被災地の現状を考える講演会「東日本大震災から5年10ヶ月―今、できることを考える―」が2月10日に中央図書館で行われ、約20人の学生が参加した。

講演会は東日本大震災の復興支援を行う学生団体「Tsukuba for 3・11」が主催。復興庁宮城復興局で3月まで復興に携わった渡邊真さん＝4月から民間団体へ出向＝が被災地や避難者の現状、学生ボランティアの意義などを話した。

講演会では、被災者に寄り添った復興の方法や持続的な被災地支援の方法などの課題について議論も交わした。渡邊さんが学生に意見を求める場面もあり、学生は「OB会を設立して卒業後も学生がボランティアに携われるようにするべきではないか」などと答えていた。

講演後、渡邊さんは「参加した学生が真剣に聞いてくれて、復興への意識の高さを感じた。今回の講演がボランティアの人材不足などの解決や継続的な被災者支援につながればうれしい」と話した。また、イベントの進行役を務めた菊池礼花さん（社学3年）は「参加した学生から多くの感想をもらえてうれしかった。これからもボランティアとして被災者を助けるためにできることを考えていきたい」と話した。（前名裕一、写真も）

被災地の現状と復興の課題について話す渡邊さん（2月10日、中央図書館で）

〝インスタ〟開始
学内の魅力発信

筑波大学広報室は2月6日から、画像共有アプリ「インスタグラム」の運用を開始した。国内外で大学を受験しようとする人を対象に、写真や動画を通じて筑波大の魅力を発信することが狙い。3月27日現在、506人がフォローしている。

これまで筑波大では、公式ウェブサイトのほか、フェイスブックや動画投稿サイト「YouTube」などを用いて情報発信を行ってきた。それらに加え、画像共有を中心とする「インスタグラム」を用いることで、日常の学生生活やキャンパスの風景をより発信するとしている。

広報室によると、今後、筑波大の研究施設など、さまざまな写真を発信したいという。また、昨年12月に結果が発表された「筑波大生フォトコンテスト」の優秀作品も発信している。

広報室の松村武大さんは「より多くの人々に筑波大に興味を持ってもらえるよう、魅力的な写真を発信していきたい」と語った。

他の国立大学では、京都大学や東京外国語大学などが「インスタグラム」を活用しており、大学のイメージ向上に役立てている。（秋田耕平）

育てる喜び食べる喜び
のうりんむら

筑波大学から自転車で東に20分。住宅地を抜けると、坂の下には田畑が一面に広がる。まぶしい朝日の下で畑作業をしているのは、農業サークル、のうりんむらの面々だ。

活動は週3回。野菜や米を育てるほか、提携している農家の牧場や果樹園で、収穫などの手伝いも行う。

49人の会員のうち、ほとんどは大学から農業を始めた。それでも、野菜の品種選びから収穫まで、全て自分たちの手で行っている。畑はテニスコート3面ほどの広さで、サツマイモやトマトなど年に約70種類の作物が育てられている。

ビニールハウスの中で、談笑しながら収穫を行う会員ら（1月31日、つくば市で）

記者も、畑での作業に加わった。朝8時に始まったこの日の作業は、チンゲン菜や芽キャベツなどの収穫と雑草の除去。芽キャベツは、傷つけないよう茎から手で一つひとつ丁寧に収穫する。また、野菜がきちんと成長しているか定期的に確認も行う。害虫や悪天候による被害を避けるため日々対策は欠かせない。

作業のノウハウは、主に先輩から後輩へと引き継がれるが、自主的な学びも欠かせない。毎週月曜日のミーティング後には、勉強会が行われる。野菜の栽培方法や品種について、図や写真を使って発表し合い、知識を深めていく。大学から農業を始めた高取美央さん（生資3年）は「日々の活動や勉強会を通して知識が身に付いていると感じる。特に、イモ類の品種や栽培方法については詳しくなったとの自負がある」と話した。

サークルの魅力について尋ねると、口をそろえて「仲間と農業ができること」。代表の小嶋淳史さん（生資3年）は「仲間と共に試行錯誤して育てた作物だからこそ、おいしさもひとしお」と、笑顔で話した。

育てる喜びと食べる喜び。2つの喜びを仲間とともに分かち合うため、今日も畑に向かう。（越智小夏＝比較文化学類2年、写真も）

Who's Who?

東京の一角で靴磨き店を営む

山邊 恵介さん（人文2年）

「靴磨きはできるだけ続けたい」と話す山邊さん（3月22日、中央図書館で）

東京都豊島区で靴磨きの店を出し、1人で革靴を中心に磨いている。技術の高さと人柄の良さで人気に火が付き、日に70人が来店することも。来店したコピーライターの糸井重里さんは「いい店だね」と褒めた。

「手間をかけた分、靴は奇麗になる」靴磨きの工程は主に3つ。まずはブラシと専用の薬品を使い、ほこりや靴に付着した細かい油汚れなどを落とす。次に革を保湿する栄養剤を全体に塗り、仕上げに靴墨で磨き上げてつやを出す。

客が作業を目の前で見ていることも多く、彼らと話すことも仕事のひとつ。「靴と持ち主の両方と向き合えることが楽しい」とほほ笑む。本格的だが、料金は1足500円と手頃だ。

「靴磨き」という仕事を意識し始めたのは長崎県佐世保市で過ごした高校時代。入学した進学校が肌に合わずに体調を崩し、通信制高校へ再入学した。だが、週に1回程度しか授業がなく、「余った時間を生かし、自分の力で何かをしてみたい」と思っていた矢先、偶然立ち寄った、とある駅の前で靴磨きの看板を見かけた。

以前、年の離れた知人から靴磨きをしていたという話を聞いたことを思い出した。「靴磨きなら、自力でもできるかもしれない」その知人に相談し、靴磨きの技術や、店を構える方法を学んだ。

通信制高校再入学の1カ月後、佐世保市の市役所近くの2畳ほどの小さな部屋を借り、「等々靴磨店」を開店。「靴磨きに関することは何でも受け付ける」との思いを「等々」に託した。料金は1足450円。相場の4分の1程度だが、「喫茶店のコーヒーが1杯500円なら。この程度の値段なら何度でも気軽に来てくれる」と考えた。

日に70人が訪れる人気店
「働くこと」の意味見つめる

開店当初はほとんど来客がなく、大赤字の連続だった。1人も客が来ない日もあり、アルバイトで赤字分を補う日々が1年ほど続いた。

「事業自体を見直さないといけない」と、他の修理業者との提携や、地元企業との契約などに取り組んだ結果、顧客は徐々に増加。開店から1年半ほど経ったころ、ついに1カ月の収支が黒字になった。たった12円の黒字だったが、帳簿に初めて黒いペンで収支額を書き込んだ時、思わず涙が溢れてきたという。

その後も客足は伸び続け、地元で評判の靴磨き店となったが、同時に「大学に進学したい」と思うようになった。きっかけは、仕事として靴磨きを行う中で「働くこと」の意味を考え出したこと。「ふとした瞬間に、自分は何で靴磨きをしているのか不思議に思うことがあった。『人はなぜ働くのか』を研究してみたいと思った」。

筑波大学への進学が決まり、「等々靴磨店」は閉店した。しかし、閉店の直前にコピーライターの糸井重里さんが社長を務める、株式会社ほぼ日が運営するウェブサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」の取材を受け、東京での出店を勧められた。「お客さんの『ありがとう』という声をまだ聞き続けたい」と、大学進学と同時に、同社が運営するイベント場「TOBICHI」（東京都港区）の1コーナーに靴磨店を開店した。店名は佐世保時代の「等々靴磨店」を引き継いだ。

大学生活との両立のため、出店は2カ月に1回だが、技術の高さと話しやすい人柄に加わえ、「ほぼ日刊イトイ新聞」の宣伝効果もあり、好評だ。

大学では文化人類学を専攻し、靴磨きを通じて関心を持った「働くこと」の意味を追い求めたい。そして、「等々靴磨店」はいつも共に歩いてきた、友人のような存在。靴磨きはできるだけ続けたい。（益本健太＝人文学類2年、写真も）

編集後記

春を迎え、出会いと別れの季節がやってきました。筑波大学新聞でも多くの先輩が巣立っていきました。それと同時に多くの新入生が筑波大にやってきました。何の因果か、今号では出会いと別れ、学内外に関するさまざまな変化を伝える紙面になったのではないかと思います▼学内では4月から留学生と日本人学生が同居する新宿舎が運用を開始し、全学計算機システムも更新されました。その一方で、32年間つくばの地で愛されてきた偉大な先輩、西武筑波店は閉店という形で卒業していきました▼紙面はつくばマップも掲載されています。それらに目を通すと自分がつくばにやって来てから街の様子も多くの変化がある様に感じます▼今号から「変わる大学」という企画が始まりました。今後も学内外の変化に敏感に、紙面を通して発信していきたいと思います。（編集長・小宮山瑛生＝社会学類3年）

次号は **5月15日（月）** 発行予定です

学芸

筑波能・狂言研究会

能「猩々（しょうじょう）」の一場面を演じる会員ら（3月31日、葛飾八幡宮で）＝秋田耕平撮影

5面へ

スポーツ

つくば体操フェスティバル

フィジオロールを使って息を合わせた演技を披露する出演者ら（2月4日、つくばカピオで）＝鈴木瑞穂撮影

12面へ

学生生活

グローバルヴィレッジ運用開始

4月から運用が始まるグローバルヴィレッジの居住棟（3月27日、グローバルヴィレッジで）＝越智小夏撮影

14面へ

学生生活

西武筑波店閉店

閉店で、市民の声が寄せられた特設のメッセージボード（2月28日、西武筑波店で）＝佐々木悠里撮影

15面へ